

やまのへのおくら[山上、憶良] 又、山ノ於、憶良。文武天皇の大寶元年正月粟田真人等遣唐使派遣の節、其少録となり、元明天皇の和銅七年正月從五位下に敍せられ、元正天皇靈龜二年四月伯耆守となり、養老五年正月には詔によつて、退朝の後、東宮に侍して居る。文獻には残つてゐぬが、大伴旅人の大宰帥時代に、筑前守であつた事は疑ひがない。又、末子と思はれる、古日と言ふの、外に、越中國の邊に住んだ子もあつた(本集)様である。

やまのへのみぬ山ノ邊御井 伊勢國鈴鹿郡山邊村。石薬師に近い鈴鹿河原の邊。

やまのゐ 山の井とは、岩間に水の湧きでる處を言ふので、泉も流れも、皆、井である。

やまのゐの 枕。あさし。山の清水の底淺い爲に、あさき・あさきなどつゞけるのである。

やまびこ(山彦) 反響。こだま。此方の聲をかなたにて言ひ返す様に聞えるから、山彦など言ふものがあると思はれるであらう。

やまふれ(山村) 後にやまむら(今昔物語)。大和國添上郡(和名抄)。今、帯解邊と言ふのは、如何。山

村中里など言ふ小名(日本靈異記)も見え、山村、臣(淳仁天皇紀)・山村宿禰(日本紀略)・山村忌寸(新撰姓氏録)・山村己知部(欽明天皇紀)などの貫地であらうと思はれる。

やまべのあかひと山部赤人 聖武天皇の神龜の初、紀伊國行幸に従ひ、天平中陪從して吉野離宮に遊び、勅に應じて歌を獻つて居る。又、春日山に上り、神岡に至り、伊豫國の温泉に浴し、辛荷島、敏馬浦に遊び、又、東國にも遊んだと思はれる歌がある。宮廷詩人の最傑出した人とせられた一人。

やまべのおほきみ山部王 壬申、亂の時、近江軍(弘文天皇方)に加つて、蘇我、果安、巨勢、比等などと共に、數萬の兵を率ゐて、不破を破らうとして、大養濱に陣した時、果安・比等の爲に殺された方をも山部王と言ひ、又、桓武天皇も、諸王の時、山部王と言はれた。卷八に見える山部王は、どちらの方だか諛らぬ。或は此二方以外の人とも思はれるふしがないではない。

やまゐ山藍 やまゐの融合。山中に生ずる一種の藍。其葉に皺のあるのが、特徴だ。又、採つて衣を

染めたので、卷九「山藍もて摺れる衣(一七四二)など、言つてゐる。

やみのよの 枕。行く先しらず。一寸さきは、角も諛らぬ闇の夜と言ふので、行く先知らずにつづけたのである。

やまゝに(漸々に) 段々に。漸次に。いよゝゝと通じる。

やよひ(三月) 彌生の義だと言ふ。萬葉集の三月は季春で、初旬には春花春鳥の盛りな時で、下旬は既に夏の茂みに近い季候である。

やら 諺らぬ。但、仙覺抄に、やらとは、水つきて、かつみ・蘆やうの物など生ひ茂りたるうき土なり。田舎の者は、やはらとも言ふ、とあるのによれば、沼地などの事と見えて、熊來のやらが適切に聞えて来る。や・やつなどに關係のある谷の意の語か。東條操氏は、常陸國のやあら・信濃國のあわらをやち(濕地)と同じ系統の語かとして(土俗と傳説一の二)ゐられる。

やらのさき(也良の埼) 筑前國早良郡。今、荒崎が其かと言ふ。糸島郡小田村の昔、韓良郷・韓泊の地

の音轉かとも言ふが、如何。

ゆ

ゆき(靱) 矢を盛つて背に負うた道具、後世の胡線、箆の類である。神代に既に、千箭靱、五百箭靱などの種類が見えてゐる。延喜式には、姫靱・蒲靱・草靱等の名稱があるが、其製作は、今一々詳細に知る事が出来ない。法隆寺の寶物中には、現存してゐる。東京大學の人類學教室には、下野國河内郡で發掘した土偶の靱がある。靱は武器中の重要なもので、これを背に負うた姿は、當代の人の懼れの的になつたものであつたらう。卷三「ゆきとりおひて(四七八)など、言ふ語は、本集にばかり見えて、他の歌集には、全く見えない。

ゆきあひ(行合ひ) いろあひ。すれちがひ。彼方からと此方からと道の出會ふところ。接頭語をつけて、卷九「いゆきあひの坂の麓(一七五二)と言ふ句が見えてゐる。又、ゆきあひのわせと言ふのは、夏と秋と行きあふ時分の早稲の意。



「ゆきかくる」とも「まゝ懸ける伴ノ緒」を懸けて負うてゐる部屬の人たちで、即、武器を執る人々。軍人の群。「ともものを」見よ。

「ゆきたらはす」行き足はす。思ふ通り先方へ行きつく。満足に行きつく。航海の危難などを凌いで、先方へ到着するに用ゐる。卷十九「韓國に行きたらはしてかへり來むますらたけをに御酒たてまつる（四二六二）。

「ゆきのあまのほつてのうらへ」壹岐ノ海人ノ秀手ノ占。壹岐國の土民のする占の術で、古事談に見えた伊豆大島の卜人などの様に、海島の土民の占うた處から、海人の占と言ふのであらう。延喜臨時祭式に卜部取三國卜術優長者伊豆五人壹岐五人對馬五人とあるのを見て、平安朝初期には、わざ／＼彼島から召してゐたので、「若取ルニハ在都之人ヲ者、自ヨリハ非ザルニ卜術絶ナルニ群ニ不レ得ニ軌充ルコトヲ」と同條に見える。此は卜象の、純朴な人によく象れると信じた爲と、古くからの傳習の結果とであらう。前期王朝の本集時代にも、既に壹岐人の卜術は名高かつたのである。貞觀五年九月に壹岐國石田郡の人で、宮主の職に在つた外從五位下

卜部是雄・神祇權少史正七位上卜部業孝に、伊伎、宿禰を賜つた（三代實錄）のは、本貫によつて姓を作られたのである。又、此等の人々が用ゐられて都に住んだ事は、伊伎、京、卜部（同集解）があつたのでも知れる。ほつては、必、占術の名であらう。が知る事の出來ぬ今日の處では、秀手と字を宛て、上手の意に説いておくが、ほんの假説に過ぎぬ。うらへはうらの動詞化で、うらふの名詞法占ナひである。伴信友は古いわが國の卜法を鹿卜と信じて、龜卜説を探らないでゐるが、水國の卜法であるから、龜卜の材料が多かつたのであらうから、強ちに龜卜を比較的新しい輸入とばかり却ける事は出來ぬ。ゆきはいきである。

「ゆきのしま」枕。いかむ。壹岐ノ島。壹岐ノ連を、本集に雪ノ連とある。此いはや行のいで、い・う列移動したのだ。音聯想の枕詞。

「ゆきのやかまろ」壹岐ノ宅麻呂。姓連。聖武天皇朝の人、傳未詳。

「ゆくさくさ」行くさ來さ。行きしな歸りしな。行くさ來さまの意で、行く時と來る時とである。續

けて用ゐれば、往復の途の心である。

「ゆくとり」枕。あそふ。大空を渡りゆく鳥が、われ一番にと、先を争うて飛ぶ狀から、つゞけたもの。或は飛ぶ鳥のあすかと同じく、あにかけたもので、あとのあを起す爲に、ゆく鳥と言ふたのかも知れぬ。

「ゆくへ」行く方。行く先。ゆくへなしは、行く先がわからない。將來がおぼつかない。行く方をしらす。行く方もしらすは、亦、行く方なしと同じ意。

「ゆくみづ」枕。かへらぬ。ときぞともなく。水は流れて歸らぬから、歸らぬにかゝる。始終流れてゐるから、卷十一「ゆく水の、時ともなくも戀ひわたるかも（二七〇四）の如き、かゝり方もある。

「ゆく〜」物思ひしげき時に、身のわく〜とゆれてゐる様な氣がして、落ちつかぬのに言ふ。次のゆくらかに、ゆくらく〜皆、同じい。行く〜とではない。

「ゆくらか」ゆる〜と、心の落ちつかぬ狀。ゆくらく〜ゆる〜のゆくに語尾らがついたのである。ゆる〜と心の落ちつかず、物思はれるのに

言ふ。天雲の・大舟の、などを冠らせて用ゐるのも、其意からである。

「ゆげ」弓削。河内國中河内郡。元、若江郡の中の郷名（和名抄）。舊大和川左岸の地で、廣く南河内の舊志紀郡へも互つてゐた様である。其中心は、今の八尾の南の邊にあつたらしく、神別弓削、宿禰の本貫で、道鏡も此族らしい、稱徳天皇の由義宮、弓削寺（續紀）・弓削神社（式）も、此内に在る。

「ゆげのりかはら」舊大和川（長瀬川）の川原。此川、又、博多川とも言うたらしい。

「ゆげのみこ」弓削ノ皇子。天武天皇の第六の皇子で、母は天智天皇の皇女大江皇女で、長ノ皇子の同母弟、草壁皇子・大津皇子等の異母弟である。持統天皇の七年正月淨廣貳を授けられ、文武天皇の三年七月二十一日に薨せられた。

「ゆげひのみみ」靱負ノ御井。平城京のうち、靱負府の邊にあつた井か。光仁天皇の寶龜三年三月三日酒を靱負御井に置いて、曲水ノ宴を催されたよしが見える（續紀）から、泉の水の流れであらう。

「ゆたねまく」齋種蒔く。ゆは齋である。田に蒔く種



にさはりない様、清めてあるのである。上田秋成は、ゆだねは五百種だ。穀種を蒔きつけるのには、其田に眞柴折りさし、繩引きはへて忌むと説明して居る。

**ゆついはむら(五百都巖群)** 巖石の群がり立つてゐる處。岩山。ゆつは多く群がつてゐる様。

**ゆづかまく(弓束巻く)** 弓の手に握る處に、蔓などを巻きつけて、用ゐ易くする。巻くと言ふよりして、妹を枕くに言ひ懸ける。卷七「南洲の細川山に立つ權弓。弓束まくまで人に知らえず(一三三〇)。卷十四「かなし妹を。弓束なべまき、もころ男の事といはゞ、いやかたましに(三四八六)。卷十二「梓弓弓束巻き易へ中て見れば、更に引くとも君がまにまに(二八三〇)。

**ゆつきがたけ(弓槻个嶽)** 大和國磯城郡。三輪山の北方にある山。齋槻が生えてゐた爲か。秦弓月、君に關係があるとするのは、俗説であらう。

**ゆつる(移る)** ち行四段活用。自動詞。うつるに同じい。一處より他處に移動する。卷四「松の葉に月はゆつりぬ。黄葉の過ぎけむ。君が會はぬ夜ぞ多き

(六二二三)。譲ると關係ある様である。  
**ゆづるはのみる(樑葉御井)** 大和國吉野離宮の水たまりの名。此井は、天武天皇の頃から、既にあつた井戸である。

**ゆとこ(夜床)** 東國の方言で、ゆとこと發音したのを、其まゝ寫したのである。夜寝る床。

**ゆはらのおほきみ(湯原王)** 天智天皇の皇子施基(志貴)皇子の御子。光仁天皇の御弟。壹志濃王・尾張女王等の父君である。傳説らぬ。

**ゆふ(木綿)** 栲の木カクの繊維にて織つた布。色が白いで、白木綿とも言ひ、白栲シロカクの木綿とも言ふ。又、幣帛ヒツを木綿と言ふ。木綿を樹につけて、神に奉るより、一般的に名の廣まつたもの。木綿しづとは、木綿を樹に垂れてつけるのである。木綿花は木綿でこしらへた飾りである。

**ゆふ楡柎** 又、兪附(史記扁鵲傳)。黃帝の時の醫者の名である(周禮疾醫註)。

**ゆふかげ(夕陰)** 夕方の物陰。夕方のうすぐらきところ。卷十「影草の生ひたる屋外の暮影ユフカゲに鳴くこほろぎは開けどあかぬかも(二二五九)。ゆふかげ草

は、夕陰に咲く草であらう。

**ゆふかたまく(夕片設く)** かたまく。

**ゆふかは(遊副川)** 吉野川へ入る枝川の名と思はれる。然るに飛鳥川をば一名遊副川と呼ぶ(大和志)とするのは、何の根據があるのであらうか。

**ゆふけ(夕占)** 日暮れ頃にする占ひ。辻に出て往き來の人の口うらを聽いて、自分の迷うてゐる事、考へてゐる事におし當て、判断する方法で、日の這入つた薄明りのたそがれに、なるべく人通りのありさうな八衢を選んで、話し、過ぎる第一番目の人を待つたのである。夕方の薄明りを選んだのは、精靈の最力を得てゐる時刻だからであらう。遙かに時代が下ると、三つ辻と定めて、其處に白米を撒いて、區劃をかい、其處を通る人の話を神聖なものとして聽き、又、禁厭の歌もあつて、道祖ミチノサネの神に祈つた様である(拾芥抄)。此は塞サヘ神をば占ひの目的の邪魔を拂つてくれるものと考へたからで、米を撒くのも、神聖で、悪神の虚言などが這入りこまぬ様にと言ふのである。ゆふけのけは占の意か。  
④ 日暮れに、辻、或は橋の袂などに立つて、往來

の人の無意識に言ふ語から、判断を得ようとする事。今の辻占。

**ゆふしやま(結石山)** 今、ゆひいし山。對馬國下島に在る。

**ゆふたすき(木綿襪)** 栲布で作つた織。神事にかけて、神につかへる。

**ゆふだよみ(木綿疊)** 栲布で作つた疊。神座としてすゝめるのである。卷三「ゆふだよみ手にとり持ちて(三八〇)などあるのは、神の座を設ける時に、捲いてあつた疊をのべるのである。

**ゆふづくひ(夕づく日)** 夕方になる日。傾いた太陽。夕つく夜との關係の有無は訣らぬ。

**ゆふづくよ(夕月夜)** 夕暮れの月。晝の明りを待ち取る月夜。上弦の月であるのと、晝の殘光があるのと、光りは弱い。

**ゆふつど(明星)** あけのみやうじやう。よひのみやうじやう。金星。又、あかばし。ゆふは夕。ついは不明。づと訓むか、つとと訓むかも不明。日の暮れには、一番注意を引くから、此名がある。



ゆふつゞの 枕。かゆきかくゆき。此星の、夕は西、朝は東と、居場處を移すところから、かゆきかくゆきに聯想したものである。

ゆふはた(纈纈) しばり染め。鹿の子。又、ゆひはた。唐土將來の染め方で作った品であらう。結びしばつて染めた上帛と言ふ意で、結ふ帛と言ふたのである。

ゆふはなの 枕。さかゆ。冠辭考には、木綿で造つた花と言うてゐる。袴布でつくり、髻華などの飾りにつけたものと思はれる。恐らく、木綿の花の咲く様などではなからう。其白々と垂れた様を、榮ゆと言ふたので、泊瀬女がつくる木綿花も、やはり綿島の様ではなく、袴布でつくつた飾りであらう。

ゆふまやま(木綿間山) 所在未詳。或は木綿山のことか。

ゆふみや(夕宮) 別の御殿の事ではない。常の御殿を、夕方を主として言ふ時の稱。或は夕宮づかへをも言ふ様である。

ゆふやがは(結八川) 吉野川の枝川の、一名木綿川に同じか。

るかも(三六〇三)。

ゆらに 物の動揺してよい音を立てる。「小鈴もゆらに」など用ゐる。

ゆらの(みさき)由良、岬 紀伊國日高郡。由良港の南の方の岬。

ゆり(後) 暫くして後。植物の百合と同音であるから、多く、白百合の・草深百合のとか言ふ枕詞をつけてゐる。

ゆるす(縦す) ゆるくするゆ。ゆるべる。油断する。氣をゆるす(イ)。卷十七「千鳥ふみ立て、追ふ毎に由流須ことなく(四〇一一)は、鷹が油断せぬ様で、(イ)に屬するもの。卷四「今は我はわびぞしにける。いきのをに思へる君を縦左久思へば(六四四)は、(イ)の方で、ゆるべて思ふとほりにされたのを悔いたのである。卷九「官にも縦し給へり。今宵のみ飲まむ酒かも(一六五七)は、今日の許可するの意に似てゐるが、ゆるべる意。

よ

ゆふやま(木綿山) 豊後國速見郡。大分灣に臨んで立つた山。今、由布嶽と言ふ。

ゆめ(忌) つゝしめ。敬虔の念を保つてせよ。おろそかにすな。注意せよ。念を入れよ(イ)。念を入れて…せよ。氣をつけて…せよ(イ)。氣をつけて…せぬやうにせよ、せぬやうにせよ。きつとすな。決してすな(イ)。此語、本来、齋むの命令形で、齋戒せよ、潔白を保て、と様の意である。記・紀に見えた「わが疊ゆめ」「わが妻もゆめ」のゆめは、此意であるが、本集には此用語例はない。本集に前後して出た文獻類に通常見えたのは、(イ)の意義である。「さとびとさわく客人もゆめ」などは、やはり此部類である。本集のは、(イ)になつてゐるものが多く、さうでないものは、大抵(イ)である。「ゆめ心せよ」などは、命令文の前提としての副詞となつてゐる。此が一轉して、禁止の前提となつたのである。本集のゆめを單に禁止にばかり考へてはならぬ。ゆゝし(忌々し) つゝしむべき事に對する氣持ち。勿體ない。戒心すべきだ。注意すべきだ。卷十五「青柳の枝きりおろし齋種蒔きゆゝしき君に戀ひわた

よきひと(良人) 神性を持つてゐる偉い人。神は言はず、仙人など言ふ類のもの。天子を斥したとするはよくない。卷六「韓衣著櫛の里の島松に、玉をしつけむよき人もがも(九五二)。卷一「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ。よき人よ。君(二七)。

よく(避く) か行四段活用。他動詞。場處、又は人を避けて、他に移る。よきぢは避き路で、まはり路・迂廻せる路・ほかの路の意。

よこしま(かぜ)邪風 わるい風。颱風。農産に妨げをする悪風。

よこす(讒す) 曲げて悪く言ふ。悪口する。實ならぬ事を言ふ。誹謗する。

よごと(吉言) お祝ひの語。賀詞。よい話。卷二十「今日降る雪のいや頻けよごと(四五二六)は、後のよい噂であらう。吉い事と譯せずとも通る。

よこぬ(横野) 河内國澁川郡。

よごもる(夜籠る) 夜の中である。夜がまだ深い。夜どほしと譯するのはわるい。まだ朝に發展しないである様。卷九「夜ごもりに出で来る月(一七六三)



と言ふのも、夜の中への意である。次條参照。  
よどもる(世籠る) まだ情事を解せぬ。世は男女の間の情事である。其に發展しきらぬのである。  
よこやまべろ(横山邊ろ) ろは接頭語。横山の邊の意。

よこゑ(夜聲) 夜もの言ふ聲。火を警める聲とか、又、夜の高聲の話とかである。卷十一「隼人の名に負ふ夜聲(二四九七)。

よさのひめおほぎみ(興謝ノ女王) 文武天皇の慶雲三年六月二十四日、從四位下でなくなられて居る。

よさみのほら(依網ノ原) 三河國碧海郡。

よさみのきとめ(依羅ノ娘子) 柿本人麻呂が、石見國に居た時の妻である。嫡妻と言ふのではあるまい。

よし(由縁) 關係。機縁。手づる。ゆかり。

よしがは(吉城川) 大和國添上郡。春日野の中を流れる川。水尾川。

よしき川 枕。よし。同音聯想である。序歌の一部と言ふ方が適當であらう。卷十二「わぎも子に衣かすがのよし木川、よしもあらぬか。妹が目を見

む(三〇一一) など、用ゐる。

よしだの(おゆ)吉田ノ老 此姓き、しだ、と訓むか。仁教の子で、字を石麻呂と言つて、瘦せた人であつたのであらう。光仁天皇寶龜九年二月に外從五位下で、豊前介となつた吉田ノ連古麻呂と言ふのが、此人ではないかとも言はれて居る。「よしだのよろし」の條参照。

よしだの(よろし)吉田ノ宜 姓連。惠俊と言つて僧であつたが、其才藝を惜しまれて、文武天皇の四年八月、勅によつて還俗し、姓を吉(或はきし)と訓むのだと、栗田寛博士は説かれた)、名を宜と賜つた。元明天皇の和銅七年正月從五位下に敘せられ、次で從五位上に進み、元正天皇の養老五年正月には醫術を以て、施十疋、絲十約、布二十端、鍬二十口を賜り、聖武天皇の神龜元年五月、更に吉田ノ連の姓を賜つた。天平二年三月には、弟子の養成を命ぜられ、五年十二月圖書頭となり、九年九月正五位下に進み、十年閏七月典藥頭となり、年七十で死んだ。曾て秋日長屋王の家に、新羅の客と宴して、「西使言歸日、南登餞送秋。人隨蜀星遠、驕帶斷雲」

浮。一去殊(郷國)、萬里絶(風牛)。未(盡)新(知)趣、還(作)飛(乖)愁(懷風藻)と。又、駕に吉野に從つて、「神居深亦靜、勝地寂復幽。雲卷三舟谷、霞開八石洲。葉黃初送(夏)、桂白早迎(秋)。今日夢淵々、遺響千年流(同上)と歌うた。大伴旅人から、松浦歌を贈られた返書も、よく出来てゐる。

よしなし(由縁無し) 訣がない。關係の無い。縁も無い。

よしぬ(吉野) 又、えしぬ。大和國南部。吉野川を中心として、北は龍門・鷹取から南葛城山に續く山脈を境として南に互る山地及び、吉野川の流域。こゝに離宮があつて、持統・文武の兩天皇は殊に屢、行幸せられた。此地は、天武天皇發祥の地であるのである。吉野國とは、此地一帯をさすのである。山と川との相應じた勝地である事は、柿本人麻呂の長歌にもよく現れてゐる。美稻の神婚傳説などが、此川についてある。

よしな よしや。どうでもかまはぬ。まあよい。どうでもよい。ゑは感歎語。よしゑは縦しやと同じ

で、それもよしの意になる(「ゑ」を見よ)。卷十一「たらちねの母に知らえずわが持たる心はよしゑ君がまに(二五三七)。よしゑやしと言ふのも、更にやしと言ふ囉しの語尾がついたまで、意味は同じい。

よすが(便宜) 縁故とするもの。たよりとするもの。たづき。よるべ。ゆかり。卷十六「志珂の山いたくな伐りそ。荒雄らが餘須可の山と見つ、憊ばむ(三八六二)。卷三「こと、はぬものにはあれど、わぎも子が入りにし山を因鹿とぞ思ふ(四八一)。寄す處で、心をよする目的點と言ふ事であらう。

よするなみ 枕。あひだ。ま。よす。かしこし。浪のよせてかへす様から、間(ま・あひだ)を聯想して、あひだもなけむ・あひだもおかす・間なく此頃、など言ふ。又、同音を繰りかへして、よすにかける。又、浪の恐怖から、かしこき人になど、つづける。

よせつな 八十綱の轉音であらう。縫せ綱ではあるまい。

よそ(外處) 他處。別處。自分を中心として、其以外のものを、差別的によそと言つたのである。人を



よそに見ると言ふのは、自分の手を離れて、自分と無関係のものとして見る、と言ふ意なのである。

**よそふ**〔装ふ〕完全に身につける。装束する。衣服や武具などを身につける。仕度をする。用意をする。は行四段活用。他動詞。

**よそふ**〔比ふ〕なぞらへる。比較する。擬する。あてて見る。下二段活用。自動詞。卷十一「梅の花まづ咲く枝を手折りては裏と名づけてよそへてむかも(二三二六)。

**よそる**〔寄る〕ら行四段活用。自動詞。寄すの再活用。卷二十「白波の寄る濱邊に(四三七九)。よるが既に、信頼の意味をもつてゐるのであるが、よそるとなると更に強く、たよりとして、近づいて来る傾向を持つてゐる。卷十四「新田山峰にはつかなく、わによそりはしなる子らしあやにかなしも(三四〇八)。又、名詞法として、よそりなしは、よしなしと同じに用ゐる。よそり妻は、信用してゐる妻の意である。

**よだつ**〔役立つ〕徴發せられる。役だち、即、上の賦役に徴發せられる事。よは訛音である。夜立つて

はあるまい。役だつの名詞が役係である。卷十四「よだち來ぬかも(三四八〇)」とあるのは、所相に用ゐたので、よだち来て来たことよの意。所能相が混乱してゐるのである。

**よち**〔同年兒〕おないどしの兒。同年輩の兒。遊び仲間。よちごとあるも同じい。男色のかたらひある兒だとも言ふ。さすれば、念者・念友など譯すべきである。

**よづ**〔攀つ〕高いものに取りすがる。手元へひきよせる。卷八「よぢてたをりつ(一五〇七)。卷十三「手弱女に吾はあれども、ひきよぢて峰もとを、に、うちたをりわれはもてゆく(三二二三)。本集には、後のよぢのぼる・山をよづなど言ふ用語例はない。

**よつ**のふね〔四艘〕遣唐使の船は、常に四艘で、當時も、孝謙天皇の天平勝寶四年に出發する、遣唐大使藤原清河・副使大伴胡麻呂等の船が、四艘であつたから言うたのである。恐らく既に一つの成語として取り扱はれてゐたのであらう。

**よど**〔夜床〕床。夜寝る床。ゆどこと音を寫したのもある。

**よとで**〔夜戸出〕夜の門出。夜おもてへ出ること。夜あるき。戸出は、家を出る時の意でなく、門を出て外に踏み出してゐる事を言ふ。卷十二「我妹子が夜戸出の姿見てしより、心空なり。地はふめども(二九五〇)。外出の途中で逢うた事を言うたともとれる歌である。

**よどの**のつきはし〔淀の繼橋〕川の淀にかけた繼ぎ橋。地名であらう。恐らく近江國高島郡の中にあつたと思はれる。本集には三更とも假書してゐる。よなかのかたと言ふのも濁であらう。今、其地は知れぬ。

**よなばり**〔吉隠〕又、吉魚張。大和國磯城郡。初瀬の東、阪路を上つて宇陀平原に出た處。磯城より宇陀へ出る北道の地である。本集に見えた猪養岡(但馬、皇女)の外に、光仁天皇の生母紀太后の吉隠(墓)がある。隠の字なまりと訓む訣は、書中に書いた。古くはよごもり・きなばりなど訓んでゐる。

**よなばり**のなみしばの〔吉隠、浪柴、野〕一本に夏身とある。浪はなで、柴は柘など、同じくつ

みと訓むのかも知れぬ。

**よに**〔世に〕ほんたうに。實に。下には常に打消の語が來てゐる。卷二十「我がつまはいたく戀ひらし。呑む水に影さへ見えて餘爾忘れず(四三二二)。卷十二「海處女かづきとるとふ忘れ貝。代二毛忘れじ。妹が姿は(三〇八四)。此語、世と關係のないものかも知れぬ。よも・よもやなど言ふ語も、此よである。或は誓約の意味を持つた齋などに關係があるか。

**よの**ほどろ〔夜のほどろ〕夜のほど。夜のうち。卷八「秋の田の穂田をかりがねくらけくに、夜のほどろにも鳴きわたるかも(一五三九)。明暗の斑ろな様だと言ふ説は、とるに足らぬ考へである。「ほどろ」参照。

**よばふ**よぶの再活用。男子が女子に結婚を申し入れるのに、古くは男子がまづ、女子を訪れて、自分の名を呼ばつた事から、求婚を、よばふと言うたのである。名のると言ふのも、此である。女子の方に應ずる意があれば、又、自分の名を言ふ。昔は女は自分の名を、許す人の外には知らせなかつたのであ



る。接頭語をつけて、さよばふと言ふのも同じい。名詞法は、よばひである。夜這ひと言ふのは、民間語原である。幾日も久しく、求婚をつづけるのが、よばひわたるである。

**よぶこどり**〔呼子鳥〕 閉古鳥と呼ばれる、郭公クワクコウの事であらう。此鳥は、ほととぎすほととぎすと混同せられてゐるが、其鳴き聲が子を喚び立てる様に聞える處から、子を失うた親の化したものなど言ふ民譚も、生じた程である。鳴き聲の「くわくこう」と言ふのを、「わがこ」「わこ」など聞いた爲であらう。卷一「大和には鳴きてか來らむ。呼兒鳥象の中山よびぞこゆなる(七〇)などは、此民譚を背景としてゐる。喚ぶと言ふ名から、人をよぶに聯想して、卷九「誰喚兒鳥(二七一三)。卷十「なこせの山の喚子鳥。君よびかへせ(一八二二)など言ふ。

**よみがへる**〔蘇る〕 黄泉より歸る意の語。生き歸る。黄泉國より還つてくる。

**よむ**〔數む〕 數へる。ま行四段活用。他動詞。卷十一「時守りのうち鳴す鼓數見者、時にはなりぬ。會はなくもあやし(二六四一)。よは代・世・重などのよ

で、重ねて見る意であらう。

**よむ** 發音の明らかでない容子を言ふ語。よは擬聲。はつきりせぬ、散漫な、人の音聲である。今日でも、啞・子ども・老人などの音聲の、うゝ・おゝなど母音に近いのと同じ理くつである。よゝいと泣く・よだれなどのよである。ま行四段活用。自動詞。言葉が齒の間から漏れるのだ、と言ふのはよくない。

**よらのやま**〔欲良ノ山〕 所在未詳。  
**よる**〔依る〕 寄る。うちよせるゆ。心をよせる。信頼するゆ。夫とたのむゆ。「よそる」参照。

**よるかのいけ**〔因可ノ池〕 大和國平群郡。今の法隆寺の近邊にあつたものと思はれる。或は平群高地に在る沼の名か。

**よるはすがらに**〔終夜に〕 今で言ふ夜どほし。夜を徹して、晝はしみに對した語。後に、夜すがら・夜もすがら、と副詞に固定した。又、卷四「ぬば玉の夜者須我良爾、あからひく日も暮るゝ迄(六一九)の様な對照もある。らは副詞語尾で、すがが語根であらう。繁・續などの意のある語か。

**よるひかるたま**〔夜光る玉〕 西域から齎した金剛

石に對する驚異を、支那から日本にも傳へたのであらう。史記に、隋公の祝元陽が死なうとする蛇を助けて後、ある夜、庭が輝いて見えるので、調べて見ると、蛇が珠を銜へて來てくれたのである。此珠が、暗夜にも光るので、夜光と名づけたとある。我が國にも、珠玉類は盛んに用ゐられてゐる、夜光珠の様なのはなかつたので、其不思議な珠のある唐土に對して、ある異郷的な憧憬を持つた事であらう。卷三「夜光玉と言ふとも、酒のみて心をやるに、あに如かめやも(三四六)。

**よろぎのはま**〔餘綾濱〕 相摸國。後の陶綾郡大磯。小磯附近の海濱。後世、こよろぎの濱と言ふ。

**よろし**〔宜し〕 適當である。よい加減だ。しく活用。善しの語根よに副詞體言語尾ろ(Vら)のついたものであらう。或はよるの形容詞活用とも考へられる。古くは、よろしと言ふ形が多く見える。後期王朝のよろしは、讚美の徹底せぬ狀で、中位の善さを言ふのであるが、本集のは、近代のよろしの用法に似てゐる。

**よろしなべ** 宜しくと、のほつて。卷一「見し給へ

ば、大和の青香具山は……。畝火の此瑞山は……。耳無の青菅山は、そとも大御門に宜名倍神さび立てり(五二)。卷六「山高み雲ぞたなびく。河はやみ瀬の音ぞ清き。神さびて見ればたふとく、宜名倍見ればさやけし。此山の盡きばのみこそ、此川の絶えばのみこそ(一〇〇五)。此らの例を見ると、名倍は並べて、宜しく並び叶うてゐるとも説け相であるが、なべは他の意味の語尾であらう。卷三「宜奈部わが夫の君がおひ來にし此背の山を妹とはよばじ(二八六)の例で見ると、並べとは説けぬ。やはりよろしなべは、圓滿具足の意の副詞であらう。

ら

**ら**〔等〕 體言にらを添へて言ふのは、其周圍、其附屬物をもこめて言ふ迄で、複數の意味は初めからして無いのである。だから、かなしき兒ら、妻の兒らと言うても、唯一人の愛人を斥すだけなのは、別に不思議は無いので、草野清民の含蓄を現す語と言ふ



説もある。など・なんか（東京）・みな（大阪）が附屬辭風に用ゐられる時と、気分は同じであるが、此は漠然と含蓄を傳へるだけで、數の觀念などは全然ない。直指を避ける後期王朝の病的な發想は、古くから胚胎してゐたのである。現在の外國文法直譯の文法から見るとはよろしくない。らは屢、ろに變化するが、意味は同じい。

ら 副詞語尾。語根の體言性を確固ならしめて、副詞の職分をさせる語。形容詞の語根・動詞の語根の中に、ら、又はな・た・ろなどのあるのは、多く此らである。又、やも同類の語尾で、古くは、やの方が多から、此は、やの轉と見るべきであらう。副詞として獨立する場合には、更に副詞語尾にを呼んで、とぼしに・かなしに・など言ふ。又、語根の儘で、にを俟たずに、修飾の位置にあることもあれば、語根自ら敘述の勤めをしたり、位置を轉倒して修飾する様な場合もある。

らし 助動詞。根據ある想像。夏來たるらしは、夏來到るらしであるが、卒然と言ふ事は出來ぬ。衣ほしたりと言ふ根據があるから、其故に夏來たるら

卷四「わぎも子は常世の國に住み家良思。昔見しより變若ましにけり（六五〇）。同「わが夫子が着せる衣の針目おちず入りに家良之な我が心さへ（五一四）。

らむ 助動詞。現在完了の想像。同時に他處に於ける他の人の動作。或は物の狀況を思ひやる語。卷二「ありがよひつゝ見らめども（一四五）、卷一「大和には鳴きてか來らむ（七〇）、卷十「鳴き渡るらむ（一九四八）など、ありがよひくして見てるだらうが、此時は大和の都に鳴いて行つてゐるだらう、鳴きわたつてゐるのだらうなど譯す。單なる想像と見るのは、よろしくない。本集には、らむ・らめの二つの活用を存してゐる。

らゆ(能) られる。ら行音の發音の困難からゆとや行音を使うたものと言ふよりも、や・らの音價動搖の激しかつた時代ではあるが、寧ろ、や行音に發音したものを、後にら行音に言ひ改めたと説く方がよい。卷十五「寐の禰良延ぬに（三六六五）、同「寐の禰良要ぬも（三六八四）などの外、不所の字は大抵らゆ（又はゆ）と訓んでよい様である。所相には、殆、用ゐる事なく、多くは不可抗、或は自然・放射

しと歸着するのである。但、全く外形上の根據のみを主張するのはよくない。内的・心理的の經過に於て、根據となるべきものがあれば、よいのである。卷七「靱かくるとものをひろき大伴に、國榮えむと、月は照るらし（二〇八六）は、外的には照るらしと言ふ想像の出る根據はないが、心理的には確實なる證據を捉へてゐる。即、此様に國が榮えて居り、又、將來、榮えようとすると言ふ心を根柢にすると、言ふのである。此類のらしには、卷二「やすみし、我が大君の夕されば見し給ふ良之。明け來れば問ひ賜ふ良志、神岳の山のみぢを今日もかも問ひたまはまし。明日もかも見し賜はまし（一五九）。過去の確定に對してけらしに代るらし、未來の想像にましを使うてゐる。らしは現在完了想像で、過去完了想像には、けらしを使ふ。本集には、らしとらしきとの二つの活用形を録してゐる。卷一「香山は焬火雄々しと、耳無とあひ争ひき、神代よりかくなる良之。古も然なれこそ、うつせみもつまをあらそふ良思吉（一三）。同「ますらをの鞆の音すなり。物部のおほまへつきみ楯立良思母（七六）。けらしでは、

的な心持ちを表す。さうして總べてらえず・らえぬと否定に言ふ。但、東語には、らるとも言つて、所相にも使つたらしく、「まぬらる奴わし」と言ふのが見える。

り

りきし(力士) 執金剛神・金剛力士、即、仁王尊のこと。佛法擁護の力者である。力士舞と言ふのは、悪鬼を掃ふ爲に、金剛力士に假装して舞つた一種の舞樂であらう。それには杵を持つて舞つたものと見える。池上寺に、屢行はれたのであらうか。

金剛力士の略。執金剛神・金剛夜叉・持金剛・護法金剛など言ふ。皆 Vajrayaksa の譯である。五大明王の一つで、北方に居る。三面六臂の忿心怒身で、七寶の瓔珞に身を飾つて、其身の丈は無量の長さである。からだ中には火焰が燃えて、あたりを睨め廻す事、獸王なる象の様で、（金剛藥叉瞋怒王息災大威神驗念誦儀軌）、手には金剛鈴（又、金剛杵）を持つ。金剛手虚空菩薩摩訶薩の權身（同上）とも、



釋迦牟尼佛の化現なる不空成就如來の忿怒身だとも  
言ふ。皆、佛法守護の天部神に、假託した説であら  
う。處が大寶積經に、金剛力士を、勇群王の子法意  
王子の化身で、前生に、父王が數多の子の未來生で、  
成佛する有様を見ようとして籌を探らした。其時、  
第一籌が淨意太子で、後に拘留孫佛、第四籌を探り  
あてたのが、後に釋迦と生じた。千人の子がかうし  
て籌を探つた後で、法意・法念の二子が自ら誓うた。  
法意は、金剛力士とならうと言ひ、法念は、梵天王  
の業を成さうと言うた。此本地譚から、今、  
寺々の門々にある、二王尊は出來たものと思はれ  
る。法意が金剛力士になつたのだから、二王は一人  
でよいと言ひ、今、阿(開口)の像が金剛で、呼(閉  
口)の像を力士だと分けて言ふ説もあるが、法意・  
法念の釋迦に近づき、佛道を勸助しようと言つた話  
から、二つの像を置く事になつたのであらう。尙、  
思ふに、金剛力士と言ふ語に、守護・力役の意味を  
持つたのは、今一つ釋迦の棺を昇いた拘尸那揭羅城  
の力士族の聯想も、伴うてゐるのであらう。

りきしまひ(力士舞) 金剛力士の扮装をして舞ふ

外國傳來の舞樂。此も伎樂の一種で、印度地方から  
支那へ、支那から我が國へ、將來せられた舞で、仁  
王の姿にいでたつて、ほこ、即、棒をつかうて、佛  
敵を降服させる狀を舞うたものと思はれる。池上寺  
に傳つたものが、名高くて、定時の法會に行はれた  
法樂であらう。今日なほ古い寺に残つてゐる練供養  
と言ふ無言の假裝行列に、佛菩薩に扮して出るもの  
などが、力士舞の風を幾分想見せしめる。りきしま  
ふかも、と訓むべきだと言つた説はわるい。

る

るゐじゆうかりん(類聚歌林) 山上憶良の撰と傳へ  
られる歌集。集中の左註に引用してあつて、歌はあ  
まり引いてゐない。殊に實物が残つてゐないので、  
どの様な書かはわからぬが、多分、古歌を主として  
集めたものであらう。古事記を引用してゐるから、  
出來たのは、其後である事は明らかである。天平勝  
寶五年に、市原王が歌林七卷を寫さしめた事が正倉  
院文書に見えてゐる。或は此書の事であるかと思

ふ。其後、平安朝に遺入つては、たゞあるとばかり  
で、諸書に名は見えるが、實際に引用したものを見  
ない。後人假託の書と言ふ説もあるが、取るに足ら  
ぬ。集中に引用した文でも訣るが、憶良のこしらへ  
た書の事であるから、定めて詳細な題詞左註等がつ  
いてゐる事と思はれて、今日、若し出たら、上代の  
歴史の明らかになる點が尠くあるまいと思はれる。

ろ

ろ ㊦らと同様の、含蓄を示す語尾。東語には多く  
古いろの方を使つてゐた様である。せろ・いもろ・  
いもなる・なるせろ・ねろ・こすげろ・横山べろな  
ど、人にも地にも限らず、ある親しみを持つた様な  
發想をする場合に使ふ。或は感歎のやなど、一つ  
で、近江のや・石見のやなどに似た用法で、のに接  
する事もあるのかも知れぬ。

ろ(有) ㊦ある、又は、である(なり)の過程を持つ  
た語尾。「をそろと言はど」などは、うそなりと言は  
ばで、今ならば、うそよ(又はぞ)と言は、位に見

るべきであらう。

㊦よの轉音。感歎語尾。「おもはずろ」と言ふの  
は、思はざらむではなく、やはり此ろの部類に遺入  
るものである。

㊦形容詞の意味を的確にする爲に、連體形につけ  
て、敘述の意を助けるもの。金澤庄三郎先生は、  
あるの過程を含んだ語尾だと言つてゐられる。戀し  
きろ<sup>㊦</sup>かも・悲しきろ<sup>㊦</sup>かも・とぼしきろ<sup>㊦</sup>かも、な  
ど言ふ。

ろかも かなしきろかも・たふときろかも、など  
は、かなしくあるかも・尊くあるかも(又はなる  
かも)などに當るのである。惟ふに、或は例のや  
らと一つの體言副詞語尾で、かなしきこと・尊き  
こと、固定させて、かも、の感歎語尾に接したもの  
か。其でなくては、記紀に見えた、大君ろかも・  
わが大君ろかも・たがたねろかも、などは説けぬ。

ろくのえまろ(用) 兄麻呂 又、餘、兄麻呂。録と誤  
寫してゐる(續紀) 處から、古義によつて、ろくと  
したのはよくない。「つぬのえまろ」を見よ。  
ろくのくわろ(用) 廣辨 傳説らぬ。兄麻呂と



おなじく角氏の誤りであらう。角氏は新撰姓氏録に、紀角宿禰の後と見える。雄略天皇の九年に、紀小弓らが大将軍となつて、新羅を攻めて、彼の地で遺體を還した時、其子の小鹿火は、獨り韓半島の角國に止つた。其で角臣と言ふたのだと言ふ。天武天皇の十三年に朝臣の姓を賜つた。本居宣長は、此人の名をひるべと訓んでゐる。

わ

**わ我** 一人稱の代名詞。指定の語尾れをとらぬのが、古い形である。あとわと相通じるので、あの方が古いと思はれるが、記紀などの可なり古い出来と思はれる部分にも、兩方ともに使つてゐる。本集には既に、がを伴はずには、所有格を示す様なことはない。又、動詞の人称を表す様な方法(次條参照)も、痕を潛めた様であるが、卷二十の東歌に「わろたびは旅と思ほど(四三三三)とあるのは、われが直に、所有格に似た務めをしてゐるとも見える。わが、われ・わけ・わろ・わぬなどの語根となつて

ある。

**わ** 感歎語尾か。「いざ和出で見む」「いざわくく」など、よと言ひかへて訣る様である。或は古く、人稱代名詞を動詞にわざく添へて言ふ、「かづきせな吾(記)などのわの固定して残つてゐたものか。

**わがいのち** 枕。なが。わが命よ、長かれと禱る意でつゞいた枕詞である。寧、序歌と言ふ方が適當かも知れぬ。卷十五「我が命長門の島の小松原(三六二一)。或は、我が命は汝がものと言ふ意で、汝がと言ふ所有格を起したのかも知れぬ。

**わかくさの** 枕。つま。わか。あゆひ。にひ。つく。うぶくしく、愛らしい妻を、嫩草を以て形容したものか。或は瓜・摘むなどに關係があるか。或は若草の食用にする部分を、特につまと言つた事、さいたづまの如きか。但、つまは、單に妻ばかりでなく、夫をもさして言ふ。又、同音を繰りかへして、わかを起して、卷十六「射ゆ鹿をつなぐ川邊の和草の身の若可倍にさ寝し子らはも(三八七四)。あゆひとかけるのは、若草を結ぶと言ふ處から、ゆひを起したか。或はいちひなどを以て行纏を作ること、和名抄

にも見えるから、若草の足結ひとかけたものか。卷十七「和可久佐能安由比多豆久利(四〇〇八)。若から新を聯想したから、或は若草で枕をあむと言ふので、にひたまくらとつゞけたものか。卷十一「若草乃新手枕をまきそめて、夜をや隔てむ。憎くあらなくに(二五四二)。又、卷十三「藤なみの思ひまつはし、若草の思就西(三二四八)と言ふは、つくにかゝつてゐる様に見えるが、よくは訣らぬ。但、つくは絡みつくなどのつくか。

**わがこころ** 枕。つくし。きよすみ。卷十三「わが心つくしの山の黄葉の(三三三三)など、言ふ。我が心を盡すを、筑紫にかけたのである。清澄の池を起すのは、男女の誓ひにとりなして、わが心は清く澄んでゐる。邪い心はないと言ふのにかけたのである。

**わかごもを** 枕。かり。若薦よ。其を刈ると言ふ所から、獵に言ひかけたのである。獵路の小野につゞく。

**わかさくらべのきみたり** [若櫻部、君足] 傳訣らぬ。若櫻部氏は、大彦命の後である。

**わかとねべのひろたり** [若舎人部、廣足] 常陸國茨城郡の人。孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。

**わかこのうら** [若浦] 紀伊國海草郡。今、和歌の浦と言ふは、玉津島明神などの聯想から出てゐる。續紀に聖武天皇神龜元年十月行幸あつて、弱浦の字を明光ノ浦と換へさせられたよが見える。今よりはもつと、海が陸地に入り込んでゐたものと思はれる。古く、此邊は、雜賀の地につゞいて、一體に若と言ひ、浦をもちかうよんだのであらう。又、まの接頭語をつけて、眞若ノ浦とも言ふ。多少讚美の意があるのか。卷七「若浦爾白波立ちて沖つ風寒きゆふべは、大和し思ほゆ(一一一九)。卷十二「衣手の眞若、浦のまなごぢの、間なく時なし。我が戀ふらくは(三一六八)。

**わがへ** [我家] うち。たく。わがいへの融合。わがへと融合する事もあるが、此は、が音の勢力が強かつたのである。或は、卷五「妹がへ(八四四)など言ふ様に、いへがへと器械化したものか。卷十四「伊香保嶺に雷な鳴りそね。和我倍には、ゆるはなけど



も、子らによりてぞ(三四二一)。

**わかみやのあゆまる**〔若宮、年魚麻呂〕傳説らぬ。  
**わかめ**〔稚海藻〕今のわかめと同じ物か否か。褐色藻類で、淺海の岩に著いて生長する隠花植物。長さ三尺内外。全體褐色で、羽根形に裂けた帯の形をして、短い柄で、岩石に密着してゐる。食用に供するもの。和布と同じ物だと言ふが、和布(わかめ)・海藻(にぎめ)・荒布(あらめ)の區別が見えてゐるか(延喜式)、別の物であらう。

**わかやまとべのむまろ**〔若倭部、身麻呂〕遠江國龜玉郡の主帳の丁で、孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人である。

**わかゆ**〔若鮎〕わかあゆの融合。

**わかゆるのおほきみ**〔若湯坐、王〕傳説らぬ。聖武天皇朝の人。産事に與る湯坐(大湯坐・若湯坐)の家筋と見えるものに、若湯坐、連・若湯坐宿禰、其部曲と見える若湯坐部などの姓がある。此王は、其いづれかに特別の關係、譬へば乳母が若湯坐氏であつたと言ふ如き事があつたからの名であらう。

**わかきみべのひつじ**〔若麻績部、羊〕上總國長柄

郡の上丁で、孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫へ遣された防人。名を串とした本は、誤りであらう。

**わかきみべのもろひと若麻績部、諸人** 上總國の上丁で、孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。

**わき**〔辨別〕わかち。區別。見さかひ。四段活用、他動詞のわくの名詞法で、思慮辨別の意になるのである。文章の一部としては、「さう言ふ風であることさへ、諛らぬ」と言ふ風に譯すべき用の方が多い。卷十二「出づる日の入るわき知らず(二九四〇)は、日が出て這入つた事さへ諛らぬと言ふので、晝夜の區別もない事。卷一「暮れにけるわきも知らず(五)。和豆肝となるのは衍で、同じく日の暮れたのも諛らず、夢中で歎いてゐる様である。卷十「わが夫子に戀ひてすべなみ、春雨の零別不知出で、來しかも(一九一五)は、春雨が降つてゐるのも、諛らぬのである。

**わきくさ**〔腋草〕腋の下の毛が多いのを、草に替へたのだと言ふが、腋臭(狐臭)、即、わきがの事であらう。卷十六の「小兒ども草は勿刈りそ。やはた

でを穂積のあそが腋草乎可禮(三八四二)は、わきくさをもぢつて、草に見立て、草はあるが、外の草はやめて、わきくさと言ふ草を刈れ、と出來ぬ相談を言つた處に嘲笑があるので、腋の毛では、尋常の事である。

**わぎへ**〔我家〕うち。たく。自分の家。わがいへの融合したもの。卷八「わぎへの里(一四八八)は、うちの處と言ふ位の親しみである。家を離れてゐて言ふ語として、奈良のわぎへなど言ふかと思ふと、又、家にゐて、わぎへのそのなども言ふ。

**わぎめ**〔我妹子〕わぎもこの訛り。東語。其條参照。

**わぎも**〔我妹〕わが妹の融合。自分の愛し、又は親しく思ふ、總べての女性に言ふ語で、多く情人・配偶者に言ふが、目上にも、目下にも、叔母にも、肉親の妹などにも言ふ。行きすりに見た賤女などに對しても、戀ひ心なくわぎもと言ひかけた、卷七「麻蒔くわぎも(一一九五)などの類もある。此語に更に子をつけて、親しみ深く言つたのが、わぎもこである。

**わぎもこ**〔吾妹子〕わが妹の融合なる、わぎもに親しみの子をつけたのである。

**わぎもこに枕** あふち。あはぢ。あふみ。ころもかす。わぎも子に會ふとかけて、あふちの花、又は淡路島・近江を起したのである。本集の頃は、相思の男女は、互に衣をとりかへ著せ合うたものであるから、さて衣貸すを序として春日を起したのである。卷十「わぎも子に櫻の花は散りすぎず(一九七三)。卷十五「わぎも子に相坂山を越え行き(三七六二)。卷十二「わぎも子に又も相海の安の河(三一五七)。同「わぎも子に衣借香の吉木川(三〇一一)。

**わくこ**〔若兒〕わくごに兩様あつて、頑是ない子をも言ふ様だが、萬葉集古義には、ある處にはわかき子と訓み、時にはわくごと訓んで統一がない。少年と言ふばかりでなく、親しみの意がある。實際、若くなくても、少年時代の稱を持ちこして、何時迄も單に敬稱として用ゐるものもある。正倉院文書に、石川年足を石川若子。寶龜年間の物と言ふ短歌標式には、柿本人麻呂をさして、柿本若子と言つてゐる。



● 貴族の少壯な男子を言ふ語で、今日の若さま・ぼつちやんなどに似た語。わくは若しに對する動詞で、四段に活用したらしい痕が見える。わかき子の融合でなく、其終止（又は語根形容詞）からすぐに、子に接したのである。多くは尊稱であるが、人名として若子をつけて言うたものもある。但、本集の久米、若子・來世、若子は、皆、前者であらう。殿の若子はお屋敷の若さまの意である。本集卷三に、頑是ない子の事を「若子をおきて（四六七）」と言うたのは、轉用であらう。

わくまのうら（分間浦） 豊前國築上郡。今の中津市の邊である。

わくらはに（邂逅に） ひよくりと。たま〜に。偶然に。不意に。ゆくりなく。よく〜のことで、やつとの思ひでなど言ふ下に、満足な心持ちで、結果を享樂する語。卷五「和久良婆爾人とはあるを、人並みにあれもなれるを（八九二）。値遇に感ずる心持ち。

わけ（我） やつがれ。わたくしめ。元、奴隸の如き賤人が、一人稱に江戸期の下郎と自ら呼んだ様に言

うた處から、奴婢でないもの迄、自遜の極を示す代名詞として用ゐたものらしい。わい・わがなど、同じく、吾を語根とした代名詞であらう。卷四「黒木とり芽も刈りつゝ仕へめど、いそしき和氣とほめむともあらず（七八〇）。下臈・下郎など譯してよいが、直接に奴婢の意ととらず、やはり「忠實な此やつがれめ」と言ふ風に、代名詞と見るべきだ。第二人稱「汝」と譯するのは、一人稱から移つた二人稱と見るべき場合に限る。其も紀、郎女の大作家持に與へた卷八「戯奴（反云和氣）」が爲わが手もすまに春の野に抜ける茅花ぞ。めして肥えませ（一四六〇）、同「晝は咲き夜は戀ひ寝る合歡木の花。我のみ見めや。和氣さへに見よ（一四六一）」と言ふのは、前に家持の贈つた歌にわけと言ふ卑稱一人稱があつたのを、利用したしやれと見るが適當で、二人稱の卑稱と見るのは、いくら戯れでもひどすぎる様である。われが二人稱に移ると、きはめて遜意を深くする様に、卑稱として用ゐられたと見る事も出来る。彼の歌に和へた卷八「我が君に戯奴は戀ふらし。賜ひたる茅花ははめどいや瘦せに瘦す（一四六二）」は、

一人稱である。

わごおほぎみ（我大君） ● 私のつかへ申す天子。我が主の皇子・王子。卷一「和期大王（五二）。卷十八「和期大皇（四〇六三）。卷二十「和其大王（四三六〇）」など、皆わごと言つた證據であるが、吾大王と書いたもの迄、わごと訓むは、如何。下のおに引かれた母音調和と見るべきであるが、長歌の儀式の謡ひ物たる性質上、意味の反省なしに、わがおほぎみと言ひ馴れてゐたのであらう。

わさ（早生） ● わせの形容詞的屈折。わせ田をわさ田、わせ穂をわさ穂、わせはぎをわさ萩など言ふ。え列音で終つた名詞は、熟語となる時には、多く、

あ列音に變つて、形容詞としての職分をとる。

わさみ（和甕） 美濃國不破郡。關ヶ原邊の地であらう。或は不破郡の東の端に考へる説もある。高市皇子の軍營を此原に張り、天武天皇が野上行宮からこゝに出張せられた事がある（天武天皇紀）。

わし ● 囃し詞。或は後のかしなど、通ずる感歎的な語尾かも知れぬ。よ又はよしと譯してわかる様だから、よし・やしと一類のものとも見てもさしつかへ

はあるまい。卷十六「おとし入れ和之（三八七八）。同「奴利之（三八七九）。同「將見和之（三八七八）。中央には既に亡びてゐたものであらう。

わすれかひ（忘貝） 今、言ふ物は、蛤に似て、殼が深く、縦に深い筋があり、且、茶褐色の斑がある。けれども、本集に果して、此貝を呼んだのか、どうかわからぬ。後世のは、萬葉・古今以來、歌によく詠まれる處から、ある貝に假に名を定めたものと思ふべきである。本集時代にも、忘れと言ふ名に興味を持つてゐる歌が多い。浪のひいた後に遣つてゐる處から、浪のわすれ貝の意で、一つの貝に限つた名でないかも知れぬ。

わすれぐさ（萱草） 後に漢名の儘、くわんざうと言ふ。山野に自生する多年生草。春になると、宿根から芽を出し、根は、三つ又は五つほどづゝの小さな塊をしてゐる。葉の形は、菖蒲に似てゐて、秋になると、長い莖を抜き出し、其先に、紅黄色の中に、黒い斑のある、單瓣の花が咲く。又、信濃邊の方言で、桔梗を忘れ草とも言ふさうだ。忘れと言ふ名に興味を持つて、屢、歌に詠まれたのであるが、此草



は禁厭にも使はれてゐた様である。唯、卷三「わすれぐさわが紐に着く。香具山の古りにし里を、忘れぬが爲(三三四)など言ふのは、一種の即興に過ぎないが、衣の紐につけて、一種の護りの様に考へてゐた事は、事實らしい。

わすれておもふ

思ひ忘れる。外の事を考へて、此事を忘れる。思ひ忘ると言ふ處を、古い格では忘るを副詞的に扱つたものか、或は思ふは、心をはたらかす事に使ひ、其事をわすれて、心を他に動かすと言ふ風に出來た語か。恐らくは前の方がよいであらう。卷十六「須磨の海人の鹽やき衣の馴れなばか、一日も、君を忘而將念(九四七)。此歌なかばで反轉するので、他は多く、わすれて思へやと用ゐてゐる。すべて否定の心持ちを伴ふ語。

わた(腸)

はらわた。ひやくひろ。卷五「美奈乃和多(八〇四)。卷七「彌那綿(一二七七)。卷十六「三名之綿(三七九一)。卷十三「蠶腸(三二九五)などあるは、蠶貝の腸を食物としたから出來た枕詞だ。

わた(大水)

海をわたと言ふ事、綿津見神が海祇神である事でも知れるが、或は海と限らず、大水を

わたと言つたのが、轉じて海のこととなつたのか、或は逆に海から淡水にも言ふ様になつたのか、明らかでない。わたると言ふ語の語根のわたは、此語に關係があらうが、渡る水面だからわたと言ふは逆で、わたを根本觀念にして出來た語であらう。卷一「渡中(六二)。卷六「渡底(九三三)など、尙、海の事を言うてゐる。本集時代には、意味の中心が稍移つてゐる様に見えて、廣い水上を考へてゐた様である。志我能大和太、夢乃和太を水の灣曲した處と考へてゐるのは、如何。夢のわたの如きは、吉野川の一部部であるが、尙、くま、えなど、似た地形とは思はれる。併、當時既に、曲と和太とを民間語原では一つに考へてゐたかも知れぬ。

わた(綿)

固有の物と、舶來のものがあつた様である。固有の種類は、所謂絮で、蘿摩(ばんやの類)、蘆の穂などの類で、此が草のわたであるのに對して、衣の原料となると言ふ意で、木綿の字を、栲・穀の類の布、即、ゆふに宛てたのであらう。さうして、草わたに對して、藪から作る眞綿を、きぬわた(絹綿の意でなく、衣綿の意で、草わたは、布に出來ぬの

に、此は衣の料の帛を織る事の出來る綿の意か)と言つたらしい。今の普通の綿は、桓武天皇の延暦十八年七月に、三河國に漂着した、所謂崑崙人の持つて居た草の實を、(後紀)十九年四月に、紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐・九州(大宰府)に植ゑさせた。植ゑ方は、日をうける土地に深さ一寸の穴を掘つて、穴の間の距離は四尺にして、種を一晚水に漬けて、翌日植ゑるのに、一つ穴には四つ宛で、土を被せて置き、水氣を多くしておくので(類聚國史)あつたが、其後、此綿種は絶えて、豊臣秀吉の朝鮮征伐の時持つて歸つたのが、其二度目の渡來で、此間は、衣服は絹でなくば、麻布・葛布を着てゐたのであらう。本集の綿は官符類に、多く單に綿と書いてゐる物が、絹や養蠶に關係してゐる(三代實錄元慶八、貞觀十二・十四)處から見ても、眞綿、即、きぬわたの事と思はれる。即、之を草わたと分つ爲に、きぬの修飾語を冠したのであらう。筑紫綿が名高くて、年々多量を買いだ(三代實錄、元慶八)とあるが、支那方面との交渉の深い九州だから、既に今の綿が渡來してゐたと想像せられぬ

でもないが、姑くきぬわたと見て置く方がよい。又、きぬわたと言ふ名稱は、後期王朝に「國々のみしやうより、せちれうに人の獻るわたなど(うづば物語)、「しづが山田をかへさねば、米穀の類もなく、園の桑をとらざれば、わたの類もなかりけり(平家物語)など、書いてゐるのを見ても、一つの成語であつた事が知れる。歴史地理卅一の三所載、南臈子(大森金五郎氏)の「木綿の種類及其傳來」に負うてゐる。わた(渡津) 石見國那賀郡都野津。和多の字をにぎたつと訓む説はよくない。

わた(海祇)

海の神(イ)。海上(イ)。わた(の)そこ 枕。おき。わたのそこは、海の底である。おきは奥で、手近の處に對して言ふ。必しも邊に對して言ふばかりではないから、こゝは水平距離の沖に對して、垂直的に水中をさして、海の底おきとつゞけたものである。

わた(度會)

伊勢國度會郡。渡會の齋宮は、渡會の地にいます神の宮。即、天子のいつきかしづき給ふ宮の意。神宮の事である。齋宮があられるから轉じたとするのは、逆である。



**わたりのやま渡り山** 石見國那賀郡。石見の國府より大和國へ上る通路に當つてゐたのである。

**わたる渡る** 甲處から乙處へ移る間の運動過程を表す。川の瀬を渡る、渡渉する。又、は行に再活用して、わたらふの語がある。意は同じである。雲間よりわたらふ月などの用例がある。

**わたる互る** つゞく。時間をふる。日を送る。前條の分化。卷十三「太夕占置きて齋ひわたるに(三三三三)。卷五「いかにしつゝか汝が世はわたる(八九二)。

**わづかやま和東山** 山城國綴喜郡。恭仁の京の西北にある山。柚山として造林せられてゐた。卷三「わが大君天知らさむと思はねば、おほにぞ見ける。和豆香蘇麻山(四七六)。

**わにこのおほとし丸子大歳** 安房國朝夷郡の上丁で、孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。

**わにこのおほまる丸子多麻呂** 相摸國鎌倉郡の上丁で、孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。

**わゝく** ぼゞける。ぼつれる。か行下二段活用。自動詞。破れるのではなく、繊維のぼやけて來る様

で、衣服に主として言ふが、此場合は、緯絲ヌキイトがすりきれて、經絲の間が透いて來るを指す。卷五「海松のごとわゝけさがれる。かゝふのみ(八九二)。

**わゝらばに** 亂れてゐる狀を形容して言ふ。卷八「玉にぬき消たす賜らむ秋萩のうれわゝらばに置く白露(二六一八)。ばらばと譯すれば當るが、斑々の意でなく、ばらばに亂れるばかりの容子である。

**わざかけやま和乎可鷄山** 相摸國足柄群山中の一峰。但、實の名は、かけ山で、かくと言ふ語の序に「我を」を据ゑたものと考へられる。關本宿の老人が、矢倉嶽(今の足柄峠の北に在つて、其峠と御殿場道を挾んでゐる山)だと言つたのは、根據が知れぬ。箱根の神山の高峰で、大地獄の眞上な冠嶺が、冠、或は冠の裝飾品を、古くかけと言つた點から見て、若しくはかけ山を、形の冠に似た點のいつまでも忘れなかつた爲に、冠嶽と言ひかへて、稱へつゞけて來たものと考へられる。

**わにこべのすけき丸子部佐壯** 常陸國久慈郡の人。孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。

**わぬ我** われ。われの音轉か。卷十四「うべ子なは、和奴にこふなも、立と月のぬがなへ行けば、戀コイしかるなも(三四七六)。尙、卷二十「大君のみことかしこみ出で來れば、和努とりつきて、いひし子なはも(四三五八)のわぬも、我にの訛りでなく、我とりつけて、などの意であらう。

**わぶ佐ぶ** 悲觀して日を送る。どうしてよいか、致し方もなく心配してゐる。ば行上二段活用。自動詞。卷十六「思ひわぶれて寝る夜しぞ多き(三七五九)とあるのが、それである。

**わる破る** 碎き破る。他動詞は四段活用で、自動詞は下二段活用だ。われにし胸は、失望した心で、無形の事に用ゐてゐる。

**われじく** 「じく」参照。  
**われと我と** 自然と。おのづと不可抗的に。ひとりで。卷十一「あしがきの中のにこ草にこよかにわれと笑まして人に知らゆな(二七六一)。

ゐ

**ゐ井** 本集時代の井は、まだ、多く掘り井であつたものと思はれる。歸化人、或は、歸朝僧などの手で掘られたものも、幾らかはあつたであらうが、多くは、自然井なる泉の水を利用して居たので、此頃の人居が、尙、此井を中心に發達してゐた事は、市が、多く井の邊(ゐのへ)に在つた事でも知れる。藤原の宮ミヤばめも、藤井フヂキが主になつてゐる。此藤井も、掘り井でなく、大きな湛へであつた事は、天のみかげ・日のみかげの水と言ふ、古い祝詞を轉用した稱へ辭で見ても知れよう。尙、古くは、單に流れ川の一部分、或は池・淵などをも言うたらしく、其遺風は、今日、尙、方言に淵・池をると言ふ地方もある。天アマ・安川ヤスガハの清き瀬を天・眞名井マナナメと言つたのを初め、段段例がある。本集時代にも、地方、或は中央にも、流れ川の用水場を、井と言つた風は残つてゐたらしい。岩井・山の井など言ふのも、岩間の清水である。井が用水路である處から、堰代ササなど言ふ語もある。



すゞがねの驛舎のつゝみ井と言ふのは、筒み井で、井筒を使つた掘り井ともとれるが、或は包み井の意で、堤様の物を築くか、蓋をした泉であつたかも知れぬ。所謂八信井も大津の走り井の類でなく、量多く噴き出す泉か、急流の水汲み場であつたのであらう。思ふに、井は共同の水汲みであつたらしく、卷九「眞間の井見れば、立ち馴らし水を汲みけむ手古奈し思ほゆ（一八〇八）。卷十四「埴科の石井の手古が言は絶えそね（三三九八）」など言ふ歌も出来、男が水汲みに出る女を見ることも出来たのであらう。田舎と言ふ語も、或は井中の義かと思はれぬでもない。井を尊重する心から、井の神は到る處に祀られた。

みかひの「井上」用水の邊。井の邊には、多く市姫を祀り、市を立てるから、井上と言ふ語が、屢用ゐられたので、卷七「春霞井上ゆたゞに云々（二五六）」の井上は、地名と見てもよし、又、井上と言へば、直に聯想する様な、名高い井があつての、半固有名詞と見てもよろしい。

みかひの「さか」猪養岡。大和國磯城郡。吉隱にあ

る岡。又、猪養山とも言ふ。  
みで「堰代」井代の義か。人工で、流れを堰いて灌漑の深み、即、井を作るから言ふのであらう。みでには、川の全體を堰くのと、一部分を堰くのとがある様である。此頃の者は、多く後者と思はれる。

みどの「おほきみ」井戸王。傳説らぬ。天智天皇・

天武天皇の頃の人であらう。

みな「猪名」攝津國川邊郡。後に郡城が變改して、隣の豊島郡へ一部遷入つたと見え、豊島の方に爲那都比古神社（神名式）がある。猪名川は、今の武庫川で、猪名の水門は、武庫川の川口である。猪名野には爲奈野、牧があつた。

みなか「田舎」邑落發達の形式から命けた人居の名で、今日の人が感じる様な、中央都府に對する地方と言ふ様な語でなかつた事は、近い地方をあがた、遠い地方をみちと言つたのから見ても、みなかと言ふ語が、地方を表したとは考へられぬ。従つてひなか（鄙處）だとする喜田貞吉博士の説の如きも、採り難い。みかと言ふ語は、元、中よりも廣く使はれたもので、人居などの意ではなかつたかと思

はれるふしが、古語にも方言にも見える。みは田居の田に關した名だと言ふ事が、あまり明らかであつた處から略して、みとのみ言うたと思はれる。田居中の人居の意で、元は必しも定住せず、農繁の時、そこで寐起きたのが、終には村の形をとつて、定住を見るに到つたものであらう。本集時代には、二様の意義の推移の時にあつたものらしい。難波田舎と言ふは、「難波は田舎である」と言ふ文章でなく、難波田舎と名詞として考へるべきで、田舎状態なる難波、即、人居疎らに定住者少い處と言ふ様な意に使うてゐるのであらう。柳田國男先生は、居中、即、家居の中で、臺地の人居から低地の田をみなかと言ひ、杖村風にみなが發達して行つたものと見てゐられる。とにかく黄牛田器を負うて田舎に將ち往い（垂仁天皇紀）た田舎の字は、田居中の掘り立て小屋などの意と思はれる上に、書紀記述の頃、既にみなかと言ふ語が、あつたのだから、此字をみなかと訓まなかつたとも言へぬ。

みぬ「率寝」も寝する。同衾する。男と女と一處になる。自動詞。いぬ（寐寝）とは別である。おも

に男の方から言ふ語で、此語の對象となる語は、助辭を伴はないで、助辭とのついてゐるのが、本則である。卷十四「筑波嶺の嶺ろに霞坐すぎかてに息づく君をゐねてやらさね（三三八八）」は、君をゐねではなく、「わが息づき思へる君なるよ。いざ君、とも寝して後こそわれを措きても行らさね」と言ふ意である。をの有無に關せず、他動詞らしく感ぜられ相であるが、本集時代には、既に自動詞的情調に固定してゐるのである。

みまちつき 望・立ち待ち・居待ち・臥し待ちなどと月あかしの戸巾は云々と言ふ、此「みまち月」は、後世に言ふ所の十八夜の月の事である。宵の程は眞の闇なのだから、月ののぼるや、殊更に明るく感ぜられて、此詞を以て「あかし」に冠らせるに至つたものであらう。

みる「居る」わ行上一段活用。自動詞。すわつてをる。下にをるゆ。ぢつとしてをる。動かすにをる(イ)。棲む。宿る。とまる(ウ)。ある。一つの働作の續く(ク)。みは、み・み・う(坐)と働いた古形の名詞法から出たもので、語尾のるは、ありの意識を失う



た接尾語である。此點、をりのりと違つてゐる。卷十七「立ちて爲底(四〇〇三)、同「立ちても爲底毛(三九九三)、卷五「二人並び爲(七九四)、卷十五「向ひ爲(三七五六)、卷九「傍爲而(一七三七)などは、坐する意である。(イ)の意に使うたのは、卷十四「つくばねの嶺ろに霞爲(三三八八)、同「霞爲流富士の山びに(三三五七)、其外ある雲・雲居など多い。かゝると譯してもよい。卷十四「望多の嶺ろに可久里爲(三三八三)、おくれゐて・とまりゐてなど言ふのも、皆、此類である。(イ)が一轉すると、卷十九「千鳥鳴くらし爲傘ところなみ(四二八八)。卷十四爲流たづの(三五二三)などのゐるとなる。記卷中「ほつ枝は鳥章賀良斯(四三)及び鳥に關したると言ふ語にあてた居の字は、すべて此である。人にも使ふ事はある様である。(イ)は、存続の意を示すもので、今のゐるの用法と似てゐる。が、(イ)(イ)の何れかに割り込ませて考へる事も出来る。今の活用は、古形の名詞法に用言語尾ををつけて、終止以下を作つたのである。今は生物の存在を示す様になつてゐるが、元は、まうすこし廣くて、ぢつとし

てゐると言ふ意味には、無生物の雲や霞も雲み・霞みなど言ふ。ぢつとかゝつてゐる意である。又、後期王朝の物だが、伊勢物語に、「煙のゐて身をやくよりも悲しきは都島べのわかれなりけり(二二二)と言ふ風なるがある。此ゐるは、古い内容を存してゐるので、今ならば、活かつてゐる・活けられてゐると言ふ處を、熾り火が在ると言つてゐるのである。又、立つとゐると言ふ時は、すわつてゐる。下にゐると言ふ事で、寐ないでゐるの場合は、居明してなど言ふのが、其である。「う」「をり」参照。  
**あるくもの 枕。たちてもゐても。** 山にかゝつてゐる雲の、起る様、懸つてゐる様などを譬喩にしたのである。拾遺集卷十三「あしびきのかづらき山にゐる雲の、立ちてもゐても云々(七七九)。  
**あるたづの 枕。ともしききみは。** 洲に立つてゐる此鳥の姿を珍重して、言ひかけた詞であらう。友とかけて、つがひを聯想したものではなからう。

ゑ

**ゑ** 感歎語尾。よと譯して詠る。形容詞にも動詞にもついで、卷十四「上つ毛野佐野のく、たち折りはやし、あれは待たむる。今年來すとも(三四〇六)。卷四「山のはにあぢ群さわざ行くなれど、吾はさぶしゑ。君にしあらねば(四八六)。苦しゑ・よしゑ・かなしゑ、などのゑも、此である。  
**ゑぎやう(恵行)** 傳説らぬ。越中國の國分寺に講師としてゐた僧である。  
**ゑぐ** 慈姑の類で、其葉は、薔に似て、もつと小さく、根に白くて小さい、慈姑の様な塊根があつて、其味がゑぐい處から、ゑぐと言ふのだと言ふ。又、芹の異名だ、とする説もあるが、従ひにくい。  
**ゑに(故に)** 其によつて。卷十五「思ふ惠爾逢ふものならば、しましくも、妹が目かれて、あれ居らめやも(三七三一)とあるのを、賀茂眞淵がゆゑだとしたのがよい様である。鹿持雅澄は、やうにと説いて、如く・通りに・まゝになど、譯すべきものと考へてゐた様である。  
**ゑにすのものと(槐、本)** 山上・春日・高市などの氏と並べてゐる處から見れば、名を言ふに及ばぬ程

名高かつた人の氏であらう。但、此氏、書物には見えて居ぬが、ある氏の複姓と見るべきであらう。  
**ゑひなく(酔ひ哭く)** 酒に酔うて哭く。くだをまく。大伴旅人の讚酒歌十三首のうち、此語が三個處も見えてゐる。字面から見れば、泣き上戸の哭く容子であらうが、單にくだをまいて、語音の明らかでないのを言ふとも、とれる様である。  
**ゑまはし(笑はし)** ほくくとした心持ちを表す語。思ひ出し笑ひをする様な快さを言ふので、卷十八「あぶら火の光りに見ゆるわがづらさゆりの花の、ゑまはしきかも(四〇八六)の上句は、さゆりを起す序と見るべきで、蕨を詠んだのでなく、愉快な心の衷を歌うたのである。  
**ゑま・ひ(笑ひ)** ゑむの再活用ゑまふの名詞法。につこりした顔つき。卷三「常なりしゑまひふるまひ(四七八)、卷十二「わぎもこがゑまひまよびき(二九〇〇)など言ふ。  
**ゑみまがる(笑み曲がる)** 首を傾けて感じ入つて、ほくそ笑みしてゐる容子。笑む時に眉の撓るを言ふとした鹿持雅澄の考へも、笑み設けだとした説



もわるい。卷十九「桃の花紅色に匂ひたる面わのうち、青柳のくはし眉根を。咲麻我理朝かげ見つゝ、處女らが手にとり持たる(四一九二)は、眉根をで、一旦きつて、よと譯するか、或は咲みまがり朝かげに眉根を見ると説くか、すべきである。

**ゑみゝゑますも** ④にこゝくしてゐる時も、又、さうでない時も引きくるめて。

**ゑむ(笑む)** ④ほくくする。にこくする。壓へきれぬ心持ちよさの湧いて来る時の容子。大笑するのでなく、僅かに口を開く位の様で、ゑを語根としてゐる。

**ゑらくくに** 心満足して歡喜怡樂する状。酒を呑んで、上機嫌の容子。ゑらはゑらぐの語根である。

を

**を(緒)** ④物を貫いてつなぎ止める糸・紐の類の總名(例)。又、用途に係らず、細長くて、紐の様な物(例)。草を以てこしらへた爲の名と見えるが、或は形の上から、尾に關係がないとも言へぬ。又、伴、緒のを。

年の緒のを、いきの緒のをなど、皆、此をに交渉あり相に考へられてゐるが、其らは、實は、何の縁もない語原不明の語であらう。玉の緒が當代以前から注意に上つて、修辭的に始終用ゐられてゐる。荷の緒など言ふ語もあるから、(例)は(例)の分化したものと見る事が出来るかも知れぬ。(例)の例として變つてゐるのは、弦緒(弓弦)である。

**を(男・雄)** ④めに對する。をとこ。男性(例)をつと。男性の配遇者(例)。又、接頭語として名詞の男性を表し、時としては、強い者・優れた者・大きな者などを示す事がある。いもせのせに同じく、稍、新しいものと云ふ事も出来るが、時代の前後は、一概には定められぬ。いも・せ、を・めは古くから併用せられてゐる。

**を(岳・峰)** ④谷に對した語。山の脊。山や丘の高み。必しも頂上の意味でなく、山中の高みは、皆である。尾の字に囚はれて山裾など、考へてはならぬ。元來をは、高地の意であるらしく、今日も方言にあるをら・たかなと言ふ語と似て、漠然たる地形を指す語らしい。むかつをは向うの山の意でなく、

目の前の高地を言ふのである。をに峽の字をあてたものが、記紀には見えるが、峽の意はない様である。  
**をのへ(峰上)** 山・丘の高みの邊。  
**をろ(峰ろ)** をと同じい。

**をろた(峰ろ田)** 東語。山田。高地につくつた田。  
**を(尾)** ④獸の尻尾(例)。鳥の尻羽根(例)。さき・すゑ・はしなどの轉義をも持つてゐた様である。

**をろ(尾ろ)** ろは意味決らぬ語尾。尾と言ふと、同じい。山鳥の尾の極尾など言ふ。俳諧派の倭學者が、山鳥の姿をうつし見る野中の水溜りををろのかいみなど言ふのは、獨斷の虚妄で、卷十四「鏡かけとなふべみこそ(三四六八)の歌を誤解したのである。

**を** ④或は尾と關係ある語で、限り・はてなど極限を言ふ語であらうか。「年のを長く」は、世のある限り、永久にの意。「いきのをに思ふ」は、生きの命の限りをかけて、即、一所懸命に思ひつめる意になるのであらうか。併、或は「いきのを」「としのを」は、すっかり別の語原を持つ語かも知れぬ。但、ともかくも、緒に關係ない事だけは、確かである。

④感歎語尾として、よに通じるものと説いてゐる。併、記紀の用例で見ても、可なり古いものと思はれるのにも、單なる詠歎から、躊躇反省の意を示す爲に用ゐられてゐるものが澤山ある。本集のをは、多くは此意味に使はれてゐる。一通りは、よ・なるよに譯しても訣る様であるが、よ・なるよと、一旦、感歎して、更にそれに・にも係らずなど、翻つて考へる意に用ゐたと見れば、一層明らかになり、適切なものが多い。此點、ゆゑ・からの反覆と同様である。卷四「難波潟潮干のなごり、飽く迄に人の見る子を。われしともしも(五三三)は、人の會ひ見る子よでも、子をば可愛しく思ふでもなく、「人の見る子よ。然るに……」「人の會ふ子なるに……」など翻すべきである。

**を(小・少)** ④接頭語。繊細・可憐な氣持ちを表すものであつたのが、本集時代には、無意味に、習慣的に附けた様である。多くは、前代から持ち越した熟語を其儘、踏襲したゞけで、地名・物名其他、奈良盛期には、自由に生きて用ゐられたのではない。  
**を** ④獨立格を示す語尾。感歎のをなるものと常に



一つにして、あげられてゐる。本集時代には、既に死語として、枕詞の後に遺つてゐた。やほたでを・みはかしを・みこゝろをなどの類である。尙、其あるものは、本集の人々の心には、目的格のをの様に感ぜられて用ゐられてゐたものも、あつたらしく思はれる。

**をかのみなと(岡水門)** 筑前國遠賀郡。遠賀川の川口の船どまり。岡は遠賀と同じで、此邊一帯の地名である。岡水門(神武天皇紀)、岡浦・岡津(仲哀天皇紀)など見える。

**をかみがは(雄神川)** 越中國射水川の一部分の名。礪波郡より出て、二上山の東方で、海に入る。礪波郡の雄神々社の邊での名であらう。

**をかもとのすめらみこと(岳本天皇)** 舒明天皇。飛鳥岡本宮に居られたからのよび名である。後、岡本宮は齊明天皇の皇居であるから、女帝の方の事と、萬葉集古義はしてゐるが、本集のは、舒明天皇の御事であらう。

**をか(荻)** 禾本科の植物で、概して水邊に生ずる宿根草。高さ四五尺になつて、莖、蘆に似て、節の間は

たぎの上の小鞍、嶺に(一七四七)とあるのは、生駒郡龍田山の一つの峰である。

**かさ(箆)** 機織の器で、竹を並べて楯形に作つてある。其目に縦の糸を入れて、間隔を調節し、又、横糸を壓して、隙間のない様にする器。機を織る時には、忙しく箆を動かすから、暇なしと言ふ意の譬へに、よく用ゐられる。

**かさだのおほしま他田大島** 舍人の家である。信濃國小縣郡の國造で、孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。

**かさだべのこいはくま他田部子磐前** 上野國の人。孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防人。名はこいはさきではなからう。

**かさ(雄里)** 所在詠らぬ。但、雄の字を用ゐる地名が多いから、小里ではなく、雄里であらう。卷十四「乎佐刀なる花橋をひきよぢて(三五七四)。

**かさむ(治む)** 亂れない様に整へる。國を統治する。卷二「和(治) 个原のかり宮にあまりいまして、天の下治賜、食國を定め賜ふと(一九九)。

**かさ(と)** とりたてゝ……ぬ。はかしくも……

短くて厚く、中の孔は小さい。花も、莖も、茅に似てゐる。「はまをぎ」参照。

**さぐ(招く)** が行四段活用。他動詞。おびきよせる。招き寄せる。本集には、鳥を待ち設ける心持ちに言つてゐる。卷十九「月立ちし日より乎伎つゝ、うちしぬび待てど來鳴かぬほとゝぎすかも(四一九六)」。卷十七「雲がくり翔りにきと、歸り來てしはぶれつぐれ呼久よしなければ(四〇一一)。

**さぐき(小岫)** をは接頭語。ぐきは峰の意。東條操氏は、常陸で言ふと言はれた(土俗と傳説一の二)。武藏野のをぐきと言はるべき地は、平野の中では、或は狭山地方の丘陵及び國府邊の獨立の岡の外はないが、其と限らずとも、多摩川向ひの相摸側の山、或は西の秩父の端山を斥したと見てもよからう。ともかくも岫の漢字の意に囚はれる必要はない。

**さぐさ(平具佐)** 在りか詠らぬ。  
**さぐらのやま(小椋山)** 飛鳥岡本宮の近傍にある山と思はれる。多武峰の端山であらう。卷八「夕されば小椋山に鳴く(伏す)鹿の今宵は鳴かず。いねにけらしも(一五一一)、卷九に「白雲の龍田山の

ぬ。立派に……ぬ。副詞語尾もを添へる事もある。本集時代、既に、下に否定を伴うてゐる。語原は長々である事勿論であるが、否定の意が其を掩うて反對を言ふ事になる。卷十四「鳥矢の野に兎(をさぎ)ねらはり、乎佐乎左毛寐なへ子ゆゑに、母に罵ばえ(三五二九)。

**さし(鴛鴦)** をしどり。水禽。形はこがもに似てゐる。雄の頭の上には毛冠、翼の上には一對の飾り羽、即、思ひ羽とも劔羽とも言ふ物が立つてゐる。雌は雄ほどに美しくはない。嘴は平たくて短く、趾の間にもみづかきがある。雌雄常住離れないので、男女の睦まじい譬喩にも使ひ、戀愛的の聯想も起したものと見える。卷十一「妹に戀ひいねぬ朝明に男爲鳥從是飛びわたる妹が使ひか(二四九一)。

**さす(小簾)** 小は意味のない接頭語。すだれ。  
**さす(食す)** めしあがる。食ふの敬語。轉じて、知らしめす。統治せられる(イ)。語尾めすと同じ様にも使ふ(ウ)。御食物ををしものと言ふ。をすくにのをすは(イ)の例。きこしをす・しろしをすは、(ウ)の例。  
**をすくに(食國)** 天皇の領せられる國。夜、食國は、



夜の神の領する國の意か。

をすての「やま(小爲手の山)」紀伊國。在りか訣らぬ。但、卷七「安太郎行く小爲手の山(一一一四)」とあるから、大和國との境と見える。本居宣長の在田郡保田庄推手村と言ふ説は、確かでない。

をそろ(虚言ろ) 嘘。偽り言。ろは語尾。或はありから退化した助辭で、なりの意を含むものか。

をだ(小田) 田。接頭語を、本集には、何の反省もなしに使はれてゐる。併、此らの中には、或は丘田の意に用ゐたものがあるかも知れぬと思はれる。

をだえ(緒絶え) 紐ちぎれ、紐の断れること。玉の緒を掛けてゐるから、緒絶えは、日常の問題であつたのである。夫婦の絶縁に譬へてゐる。

をだの「おほきみ(小田ノ王)」 聖武天皇の天平六年正月從五位下に敍せられ、十年閏七月大藏大輔となり、十六年二月木工頭で恭仁宮の留守となり、十八年四月因幡守に移り、從五位上に進み、天平勝寶元年十一月正五位下に敍し、ついで正五位上になつた。

をだのことぬし(小田ノ事主) 傳説らぬ。流布本に

は小田事とよりないが、六帖にことぬしとある。

をたひの「おほきみ(小鯛ノ王)」 傳説らぬ。但、小註に、小鯛ノ王者、更名ニ置始ノ多美ノ斯人也。とある。置始ノ連を賜つて、臣下に列した人であらう。

をち(彼方) 向う。あちら(イ)。遠い處(イ)。場所を示す代名詞。をちこちは彼方此方で、あちらこちらの意。又、時間を表す時に用ゐる事もある。卷四「眞玉つく彼此かねて言ひは言へど逢ひて後こそ悔いにはありと言へ(六七四)、卷十二「眞玉つく越乞かねてむすびつるわが下紐の解くる日あらめや(二九七三)。をちは過去、こちは現在及び未來にかけてゐる。又、未來にも言ふ。卷十五「このごろは戀ひつつもあらむ。玉くしげ明けて乎知欲利。すべなかるべし(三七二六)。

をぢ(翁) ぢいさん。老人(イ)。年とつた人を呼ぶ時の二人稱の代名詞(イ)。

をちかた(彼方) あちらの方。向うの方(イ)。遠くの方(イ)。古くより單に向うの方、遠方など言ふに止らず、邊土・田舎など言ふ意に使つてゐるのでないかと思はれる。恰もあなたとあがたとに關係があり相

な様に。卷十一「彼方の赤土少屋にながめふり、床さへ濡れぬ。身に副へわざも(二六八三)、卷二「大名古が彼方野邊に刈る草の束の間も我忘れめや(一〇)」などに、さう言ふ意が感ぜられるのは、彼方乃繁木我本(大祓)。烏智可施の阿婆努のきどしともさす(齊明天皇紀)などに徴しても、理由があり相だ。

をちみづ(變若水) わかやぎの泉。fountain of youth。若がへりの水。支那思想から來たものか。飲めば若くなる不思議な水。かの養老の水も、此一種である。本集時代の人々は、此泉の實在を信じたものらしく、かの多度山の養老の泉の見出されたのも、或は天子、方士の言を信じて、諸國に若やぎの水を求めしめられた結果かも知れぬ。多く、此水は月中にあるものとして考へてゐる様である。不老不死の泉と言ふよりも、若がへる泉と信じてゐた様である。卷四「わが手本纏かむと思はむますらはは變水とめよ白髮生ひにたり(六二七)。卷十三「月よみの持たるをち水い取り來て(三二四五)。月神が持つてゐると考へたなどは、太古の月讀神と、支那流の月

神思想との相違を示してゐるので、山城國綴喜郡には月神の社もあつた。持たると言ふからは、單に月中にあると言ふのではなからう。卷四の變水は、古くから戀水として、なみだと戲訓せられたものであるが、友人武田祐吉の創意で、をちみづと訓む事になつたのである。

をち(復つ) くりかへす。もとに還る。再戻(イ)。若がへる(イ)。上二段活用と思はれるが、連體以下の形は見えない。をちかへり鳴くと言ふ句は、集中に數處ある。卷十七「手放れも乎知もか易き此を措きて、またはありがたし(四〇一一)。此も鷹が、出發も、立ち歸りも澁ることなく、使ふによかつた事を言ふのである。卷六「いはつなのまた變若反あをによし奈良の都を又も見むかも(一〇四六)も、變若反の字は、(イ)の意であるが、其は宛て字に過ぎないで、實は(イ)の意ともとれる。(イ)の用語例のものは、卷五「我がさかりいたくくだちぬ雲にとぶ薬はむとも麻多遠知米也母(八四七)。卷六「いにしへゆ人の言ひ來る老い人の變若云水ぞ。名に負ふ瀧の瀬(一〇三四)。卷四「我妹子は常世の國に住みけらし。昔



見しより變若ましにけり(六五〇)。又、變一字で、つと訓ましたのは、卷三「わがさかり復將變八方ほとほとに奈良の都を見ずかなりなむ(三三二)。變水と書いてをちみづと訓ませる處もある。

**きつくば**〔小筑波〕<sup>㊦</sup> つくばと同じ。常陸國筑波山及び山下の地方。

**きつくばね**〔小筑波嶺〕 筑波山。

**きづめ**〔小集樂〕 神事の日に、氏子の者が神社近くに集つて、宴樂をするのだと言ふ。或は歌垣・嬋歌會の類の行事か。左註には衆集野遊の字が見える。をづめと訓む事、尙、一部の疑問が残つてゐる。仙覺抄にはをべらとも見える。卷十六「住の江の小集樂に出で、まさかにも己妻すらを鏡と見つも(三八〇八)。をの字に小を宛てたのは、民間語原であらう。併、紀卷二十七「うちのはしのつめの遊びに出でませ子(二三一)のつめは、此に關係あるか。

**きてもこのも**〔彼面此面〕 をちもこのもの詛り。をちは遠方にも通ずるあちらと言ふ語。あちの方面、こちらの側の意。山について言ふ語。

**きとめらが** 枕。そてふる。布留山の序。袖ふるを

起す爲に、をとめの舞ひぶり、或は人を喚ぶ様に聯想して、枕詞としたのである。

**きとめらに** 枕。あふ。處女に媾會する意から、逢坂山を起す。

**きなのを**〔平奈之峰〕<sup>㊦</sup> 山の名。今、知る事が出来ぬ。

**きぬのあはまる**〔小野、淡理〕 傳説らぬ。朝臣姓の人であらう。名、或はあはまさとも訓むか。

**きぬのおゆ**〔小野、老〕 姓朝臣。元正天皇の養老三  
年正月從五位下に敍し、四年十月右少辨となり、聖  
武天皇の天平元年三月從五位上、三年正月正五位  
下、五年三月正五位上、六年正月從四位下になり、  
九年六月十一日大宰大貳で卒した。大伴旅人が大宰  
帥の頃は、少貳であつたと見える。

**きぬのくにかた**〔小野、國堅〕 姓朝臣。聖武天皇の  
天平十一年に大初位上史生であつた。

**きぬのたもり**〔小野、田守〕 姓朝臣。聖武天皇の天  
平十九年正月從五位下に敍し、天平勝寶元年閏五月  
大宰少貳となり、孝謙天皇の天平勝寶五年二月遣新  
羅大使となり、四月大宰少貳となる。ついで天平寶

入である。

**きはな**〔尾花〕 薄。禾木科の自生の多年生の草。高  
さ七尺位になる。秋開けて、長い穗状の花が集つて  
莖の頂に簇生する。をばなと言ふのは、尾の様だか  
らの名か。秋の七草の一に數へられる。卷八「萩が  
花・乎花・葛花・撫子の花・女郎花、又、藤袴・朝  
顔の花(一五三八)。

**はつをばな**〔初尾花〕 はじめて穂に出た頃の、若  
やかな輝いたのを、賞美して言ふ。卷十一「さをし  
かの入野のすゝきはつをばな(二二七七)。

**きはなり**〔放髪〕 をは接頭語。はなりに同じい。童  
女の髪(イ)の形(イ)。さう言ふ髪形にしておく年頃の童女  
(イ)。

**きはりだ**〔小墾田〕 又、小治田、大和國高市郡。元、  
飛鳥の都の一部分の地名。恐らく其南の部分と思は  
れる。推古天皇の十一年、豊浦宮から小墾田宮に  
遷られた。奈良に遷都あつて後は、飛鳥・藤原京を  
こめて小治田京とも言つてゐる様である。此は地名  
の發展と、今一つは飛鳥京・藤原京と言ふ、紛しさを  
さけたのであらう。現に奈良遷都の際には、藤原

字元年七月刑部少輔に移り、二年遣勃海大使として  
行つて、大使なる輔國大將軍兼將軍行木底州刺史兼  
兵署少正開國公楊承慶以下廿三人を從へて、歸朝し  
て、十月從五位上を授かり、宛も唐の安祿山の亂に  
遭遇したので、其状を上奏して居る。

**きぬのつな**〔小野、綱手〕 姓朝臣。聖武天皇の天  
平十二年十一月外從五位に敍せられ、十五年六月内  
藏頭となり、十八年四月上野守に遷り、從五位下に  
進んだ。

**きぬのまへつきみ**〔小野、大夫〕 「をぬのおゆ」參  
照。

**きのかみ**〔雄ノ神〕 男の神。主として、山の二上山型  
で、男體・女體ある時に、男體の峰をさして言ふ  
語。山岳神靈を信じた時代に、山を直に神と觀じた  
のである。卷九「嘯き登り、峰上を君に見すれば、  
男神毛許し給ひ、女神も倅ひ給ひて(一七五三)。

**きのと**〔斧音〕 をのおとの融合。をの、音の、落  
ちたのではない。

**きはつせべのかさまろ**〔小長部、笠麻呂〕 信濃國  
の人。孝謙天皇の天平勝寶七年、筑紫に遣された防



京をも飛鳥の里と言はれたらしい、紛しい御製がある。延喜式には、治田神社がある。小治田の地であらう。卷十一「小墾田之坂田の橋のくづれなば、桁より行かむ。な戀ひそ我妹(二六四四)。

**をはりだのあづまろ**〔小治田ノ東麻呂〕 傳説らぬ。小治田氏は朝臣姓。武内宿禰五世の孫、稻目宿禰の後である。飛鳥の小治田に居た處の家名であらう。

**をはりだのひろせのおほきみ**〔小治ノ田廣瀬ノ王〕 單に廣瀬ノ王とも言ふ。小治田は居所より言ふか。思ふに飛鳥川の廣瀬の地に家が在つたので、廣瀬郡の廣瀬とわかる爲の名か。天武天皇の十年三月川島皇子・草壁皇子等と共に帝紀及び上古の諸事の記定を命ぜられ、十三年二月淨廣肆であつたが、畿内遷都の地を視察し、十四年八月畿内の入夫の兵を校し、持統天皇の六年三月伊勢行幸に留守し、文武天皇の大寶二年十二月從五位下で、造大殿垣司となり、三年十月持統天皇の御葬司御装、副となり、元明天皇の和銅元年三月從四位上で、大藏卿となり、養老二年正月正四位下に進み、六年正月二十八

日散位で卒せられた。又、廣瀨ノ王。

**をはりだのひろみ**〔小治田ノ廣耳〕 姓朝臣。續紀には廣千とある。恐らく此人の誤りであらう。廣千は、聖武天皇の天平五年三月外從五位下に敍せられ、十一年正月從五位下に進み、十三年八月尾張守、十五年六月讃岐守になつて居る。

**をはりだのもろひと**〔小治田ノ諸人〕 姓朝臣。聖武天皇の天平元年三月外從五位下に敍せられ、九年十二月散位頭となり、十年八月豊後守に遷り、十八年五月從五位下、孝謙天皇の天平勝寶六年正月從五位上を授けられた。

**をはりのきぐひ**〔尾張ノ少咋〕 聖武天皇朝の人。大伴家持が越中守であつた時、越中國の史生であつた。姓は連であらう。

**をふ麻原** 麻の澤山生えてゐる場處。ふは原の意。生のつまつたものではない。卷十一「櫻麻の苧原の下草露しあれば(二六八七)。

**をふ終ふ** 他動詞。は行下二段活用。終へる。完結する。成就する。成功する。卷十四「紫は根をかも終ふる。人の子のうら悲しけを、寢を終へな

くに(三五〇〇)。根を終ふは、根を探り果して残さぬ事であらう。寢を終ふは、共寢をする事に成功するの意。

**をふ終ふ** 完全圓滿に事を處理する。遺漏なくするの。しまひ迄爲遂げる。とゞのつまり迄おしとほすの。此語、今は單に、しまふ・遂げる・はたすなど、譯されて了ふが、本集のをふは(の)の兩義を心得て見ねばならぬ。即、副詞過程が深く含まれてゐるのである。祝詞に屢見える稱辭竟奉留など言ふのも、決して終る意でない事は、常に文章の初めに來て、「何神のみ前に……」と言ふ風であるのでも知る事が出来る。古今集に見えた卷一「陸月たち春の來たらばかくしこそ梅を折りつゝ、樂しき乎倍米(八一五)のをふも、(の)の意味に於て、完全に説く事が出来るのである。同じ例に屬するものには、卷十九「春のうちの樂しき終者、梅の花たをり持ちつゝ、遊ぶにあるべし(四一七四)。古今集卷二十「新しき年の始めにかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ(一〇六九)などがある。

**をふのさき**〔麻生ノ埼〕 越中國水見郡、布勢ノ海の中

にあつた埼の名。布勢湖の變改から、今は恐らく其地も、平地の高處位になつた事であらう。

**をみなへし**〔女郎花〕 又、娘部思。佳人部爲。美人部師など假名書きする。敗醬科に屬する山野自生の多年生。草三四尺に延び、葉は復葉で對生してゐる。秋になると、黄色な小粒の花が、繖形に列んで奇麗に咲く。秋の七草の一である。宛て字を見ても知れる様に、をみなを民間語原的に女に聯想してゐた事は知れる。又、をみなへしから既に、をこへしの名を作つてゐた事も、卷二十一「秋の野に今こそ行かめものゝふの乎等古乎美奈の花にほひ見に(四三三七)とあるので知れる。女郎花の字は、菊の異名として作られたもので、をみなへしの事でない、とせられてゐる。

**をみなへし**。枕。さき。卷十「女郎花咲野に生ふる白躑躅(一九〇五)。同「女郎花咲野の萩にほひて居らむ(二一〇七)。卷四「女郎花咲澤に生ふる花勝見(六七五)。卷七「女郎花生澤邊のまくす原(一三四六)など、見えてゐる。女郎花の咲と言ふのに、佐紀とかけたのである。さて佐紀は、大和



國添下郡の郷名で、その澤を佐紀澤、野を佐紀野と言ふ。生澤もおふる澤邊でなく、さきさはと訓むべきであらう。

**をみのおほきみ(麻績王)** (新種) 日本紀によると、天武天皇の四年四月三位で、罪あつて因幡國に流された。一子は伊豆島、又、一子は值嘉島に流された。卷一の伊勢國伊良虞島に流すと言ふのも、一説であらう。常陸國行方郡板來の驛の西の榎林の在る處が、天武天皇朝に、此王を居させた處、と傳へるが(常陸國風土記)、現にある。契沖は、父輕くて子の重いのは、子の罪に坐したものだらう、と言つてゐるが、何とも訣らぬ。壬申の亂の關係かも知れぬが、此亦何とも言はれぬ。貴種流離譚の古いもの、一つで、更に古いのは、久米、若子であるが、此は、其が後の形であらう。海邊の土地と貴種流離とが、備つて居ると、此王の事と考へられる事になつたのであらう。日本紀に傳へた通りの事實を、あちこちで附屬したと説かれ相であるが、日本紀の方で、因幡の古傳を採用したのかも知れぬのである。奈良の文獻が皆、違つた傳へを持つて居るのは、おもしろい事である。

ある。

**をり(坐り)** (種) 行變格活用。自動詞。ゐるの状態的なに對して動作的に使つてゐる。而もありの情調を多量に持つてゐる。ゐるを使ふよりも、此意味には、をりを多く用ゐる風が見える。卷十九「い群れて乎禮婆(四二八四)。ゐとありとの融合。ゐるよりは存續の過程を多く含んでゐる。生物等の存在する事を示す語。すわつてゐる。ありつゞく。寝ないでゐる。ぢつとしてゐる。此はゐるの様に無生物に用ゐる事はない。

**いへをり** 家を作つて住む。いほると言ふ語の元か。

**をる(折る)** 行四段活用。自動詞。波のうちかへし翻る様を、をれると言つたのである。波折と言ふ名詞もある。卷七「今日もかも沖の玉藻は、白浪の八重折之於丹みだれてあらむ(一一六八)」。

**をる(浸る)** (種) 本集時代には、既に死語の部に這入つてゐたかも知れぬ。やしほをりと熟して残つてゐた語。普通に醸むの意に考へられてゐる。或は飽和などの意で、上ずみを捨て、濃くする意かと考へてゐる。

る。酒折の宮のをりも、此意であらう。「やしほ」参照。

**をろ(がむ)拜む** 這ひつくばうて、お辭儀をする。低頭平身する(け)。をがむ(け)。本集には、まだ明らかに(け)は出てゐぬ様である。「折り屈む」だと説く様に、身を折つて敬ふ様に使ふ。がむはやさかむなどのかむと同じ語尾で、屈むに似た内容の語の退化であらう。古い最高の禮法では、跪き匍うた上に、掌をも合せたものか。卷三「鹿こそはい這ひをろがめ(二三九)」は、跪伏の様を主として敍べてゐると見える。

**をる(撓る)** 行四段活用。自動詞。ふつさりとおる重みに撓うてゐる容子。をり、りにをりと言ふは、木の枝などのぶらぶらに撓うてゐる事。咲きををるは、花が枝もたわむ迄咲いてゐる様である。



あとがき

○『萬葉集辭典』は、大正八年一月、文會堂書店から發行された。定價二圓五十錢、四六判布裝幀。本文が三百五十二頁、補遺が百三十八頁から成り、上下二段組、標目は五號ゴジック、釋義は六號活字を用ひた。題簽は著者のペン字。卷頭に芳賀矢一博士の序文・自序及び凡例を掲げた。

○本書は、芳賀博士の序文に言ふ如く、當時においては全く空前の企畫であつた。數名の友情に援けられて二年半の間、非常な苦勞を重ねて世に出た書物である事は自序に詳しい。後年、著者は研究が進むにつれて、全面的に改修しようと企て、自ら多少筆を進めたが、終に完成するに至らなかつた。

○全集所收のものは、著者が改修の爲に自ら用意し、加筆したものに據つた。従つて原著とは、多少、面目を異にした所がある。

○全集に所收するに際しては、全面的に校訂を加へたが、所説にあつては著者が自ら改めた以外は聊かも改めず、體裁においても概ね舊を存するやうに努めた。蓋、本書は既に古典であり、その成立にも價值があるからである。唯、著者の遺圖を汲みてわづかに次の諸點だけを改めた。

一、補遺を本篇に組み入れた。檢索の便を圖つたまでである。しかしその場合にも尙、補印を附して本篇



と區別したのは、原著の補遺篇は著者が悉く自ら筆を執つたものであり、本篇は種々の都合から著者の筆が十分に加つてゐないものが多いからである。このことは著者が常に氣にしてゐたのである。

一、引用の歌の訓は、明かなる誤りでない限り原著に據つた。『口譯萬葉集』や後の著者の訓や註釋と一致しないものがあるが、蓋、本書の成立當時の訓として尊重した爲である。

一、釋義に至つては、焉馬の誤を正す外、一切改めない。

一、釋義の中、傳未詳、或は所在未詳とあるもの、その他の解釋において、今日は既に明かとなり、或は著者が自ら他の著述等において改めたものも多いが、しばらく前の儘にしておいた。

一、引用の歌に『國歌大觀』の番號を附したのは、一は檢索の便を思ひ、一は『口譯萬葉集』及び全集の總索引に相應する爲である。

一、人物の傳記や國郡の記載の體は、概ね前に據つたが、尙、月日・村名等を附加した所もある。

○本書の成立事情を知る便を思ひ、原著に寄せられた芳賀博士の序文を次に掲げる。

#### 序

萬葉集の口語譯は折口君が始めて試みた企であつて、それが大方の歡迎を得たことは、同君の爲にも祝し、それだけ祖先の歌が國民に理解せられたといふ點に於ては、祖國の爲にも喜ばなければならぬとおもふ。口譯萬葉集三卷が成つて、今度は萬葉集字典が出来た。萬葉集に關する著作は澤山あるが、萬

葉集字典といふものも、亦これが始めてである。人名地名から主要な言葉まで解説せられて居る本書は、口譯萬葉集を離れても、亦一種の價值あるものであると信ずる。これが出るまで、過去一年間、折口君と書肆とは非常にもつれ合つた。書肆は急ぎに急ぐ、折口君は訂正の上に訂正を加へる。やうやく本書の出來上つたことを、私は唯喜びに喜ぶのである。

大正七年十一月

芳賀 矢一

しるす

○本書に加へられるべき自筆原稿の一部を、ごく最近になつて発見したので、次に所掲しておく。〔新補の印を附すべきもので、紫色のインキ、藍卦ノートの切れ端を用ひてゐる。〕

たけちの<sup>一</sup>を<sup>二</sup>かもとの<sup>一</sup>みや<sup>二</sup>にあ<sup>三</sup>めが<sup>四</sup>した<sup>一</sup>。し<sup>二</sup>る<sup>一</sup>す<sup>二</sup>め<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>み<sup>一</sup>こと【高市、岡本宮御宇天皇】舒明天皇。

其都、飛鳥岡の下に宮があつたから。飛鳥岡本宮と言ひ、後飛鳥の地迄を高市の地にこめる様になつてから、飛鳥の岡の下から獨立して、岡本宮となつて居たのを、高市なる岡本宮の天子の意で、かく稱へ来たものであらう。彦人、大兄、皇子の子で、御諡は、息長足日廣額、天皇と言ふ。皇極（齊明）天皇の御夫である。

——の<sup>二</sup>み<sup>一</sup>よ【——代】舒明天皇治世十三年を斥す。長歌二首、短歌一首を載せて居る。

○動物・植物・器物・地形その他に關する圖版や寫眞版の挿入は、豫ねて著者が意圖してゐたが、これまた原著の態を存して省略することとした。

あとがき

折口博士記念古代研究所





折口信夫全集 第六卷

定價九五〇圓

昭和四十一年四月十五日印刷  
昭和四十一年四月二十五日發行

編纂 折口博士記念  
古代研究所

發行者 宮本信太郎

印刷者 山元正宜

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一  
電話(五六一)五九二一  
振替東京三四



本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
原・口繪印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
函貼用紙 特種製紙株式会社  
クロス 日本クロス株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 協和製本株式会社







